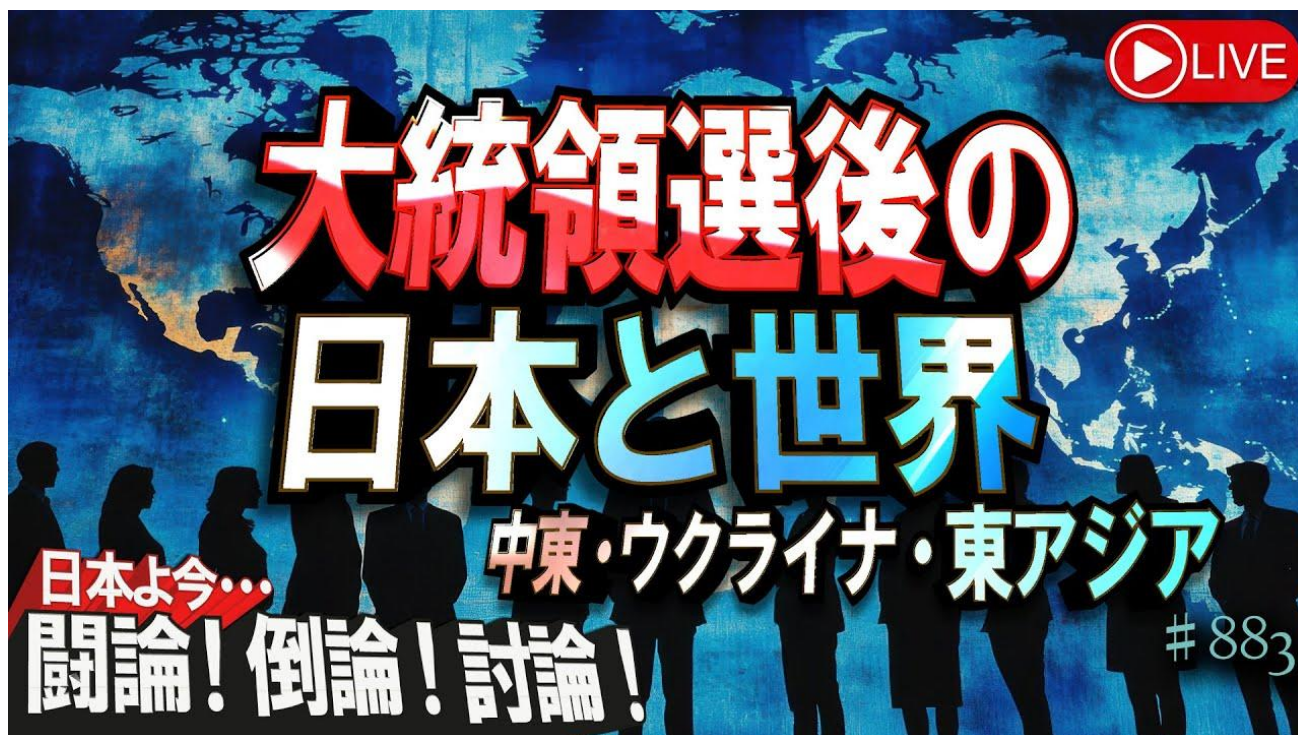




日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第883回 大統領選後の日本と世界（中東・ウクライナ・東アジア）

R6/11/15

パネリスト：

石田和靖（国際情勢 YouTuber “越境 3.0 チャンネル”）

大井幸子（国際金融アナリスト・武蔵野大学客員教授・株式会社 SAIL CEO）

福井義高（青山学院大学教授）

藤和彦（経済産業研究所コンサルティング・フェロー）

山中泉（著述家・一般社団法人 IFA (International Freedom Alliance) 代表理事）

ロバート・D・エルドリッチ（エルドリッチ研究所代表）※スカイプ出演

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！２０２４第８８３回目の討論となります。今日はアメリカ大統領選の結果を踏まえて、これからの世界と日本『アメリカ大統領選後の日本と世界』こういうことで、皆さんにお集まり戴きまして議論してみたいと思います。中東では、イスラエルが今回、昨日ですか、ガザ地区に回廊を設けて基地を置くとか、もう永久駐留っていうか、こういうところでスタートじゃないかって言われているようなことも起こっています。

４万３千５００人以上の方が殺されているというか、こういうものが続いている。バイデン大統領は一時、武器輸出をやめるぞと言っていましたけど、昨日の副報道官の話だと、もう言わないと、援助は続けると。まあ、こういう中東の情勢になっています。

それからサウジアラビア、所謂、ムハンマド皇太子がパレスチナの兄弟を支持すると。これ以上、虐殺を許さないというようなことを、アラブ諸国の皆さんと集まった時に言ったとか、このイスラエル・パレスチナ戦争、そしてウクライナの問題、北朝鮮が入ったとか入らないとか、こういった問題の中でウクライナも、まあ、我々の分析っていうか、こういう討論を何度もやっていますけど、圧倒的にウクライナは敗れ続けていると。

今回、露呈したのは日本のマスメディアが正しい事を、ずうっと報道してこなかったというようなことを含めて、ウクライナ、そして今回、台湾、朝鮮問題ですね。もっと言えば日本の問題ですけれども、今日も２０日、続けて尖閣諸島では、武装公船が連続して接続区域に侵入が連続しているといった状況を踏まえまして、石破さんは、もう海外へ行きましたけれども、さあ、こういう状態の中で、皆さんがどうお考えになるかを、まず、大統領選の感想から聞いてみたいと思います。では、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、著述家で一般社団法人ＩＦＡ(International Freedom Alliance)代表理事、山中泉さんです。宜しくお願いします」

山中「宜しくお願いします」

水島「国際金融アナリスト、武蔵野大学客員教授、株式会社ＳＡＩＬ、ＣＥＯ大井幸子さんです。宜しくお願いします」

大井「宜しくお願いします」

水島「経済産業研究所コンサルティング・フェロー、藤和彦さんです。宜しくお願いします」

藤「あ、宜しくお願いします」

水島「青山学院大学教授の福井義高さんです。宜しくお願いします」

福井「宜しくお願いします」

水島「国際情勢 YouTuber “越境３．０チャンネル” 石田和靖さんです。宜しくお願いします」

石田「はい、宜しくお願いしまあす」

水島「そして今日はスカイプのご出演でございます。エルドリッチ研究所代表のロバート・エルドリッチさんです。宜しくお願いします」

エルドリッチ「宜しくお願いします」

水島「はい。今日は、このメンバーでお送りします。これだけのメンバーにお集り戴いていますから、アメリカ大統領選の結果にも色んな感想があると思います。それぞれ、展望も含

めてお聞きしてみたいので、コンパクトにお話し戴ければと思います。まず、山中さんからお願いします」

山中「はい。今回の大統領選について日本のマスコミは物凄い拮抗していて、若干、ハリスが上回っているとか…」

水島「はい」

山中「そういう話で、ただアメリカの大手マスコミも、みんな、同じような話で、非常に似ているのは2016年のヒラリー/トランプの時も同じく、マスコミと世論調査会社が大きく外したんですね」

水島「そうですね」

山中「ええ。あの時はヒラリーが絶対に優勢でトランプには勝ち目がないって話だったのが、結果は逆になってしまった。いくつもあって伏線としては、やはり2020年の不なんとか選挙、どお〜んとバイデンのジャンプがあったことで、また今回も、あれが起きるだろうという話は、ずっとあって、実は2016年もその前から民主党は、ずっとやっている、私もアメリカへ行って民主党の運動員をやっていた人達が周りに親戚にも居るもんですから、どのようにやってきたのかも、よく聞いているんでね、何も取材して、どうのという話じゃなくて、いや、私は直接、話を聞いていますから、ありとあらゆる手口があります」

水島「うん」

山中「ただ2010年、20年の、あの時は、やっぱり郵便投票、コロナの真っ最中だったので…」

水島「そうですね」

山中「あの時までも言われているのはバイデンという人が大量に8千5百万票、取ったって、その1千5百万票は何処から増えて、だって、今、ハリスさんは7千万票しか取っていない訳ですからね。いつの間にか1千5百万という、とんでもない数が何処かから、あったというのは、あの当時から言われていて…」

水島「はい」

山中「トランプは、それまで、どの大統領よりも取った7千5百万票を取ったけど負けた。まあ、そういう中で、今回は、それがあるだろうってということで、私は、あったと思うんですが、遥かに、この4年でバイデンじゃなくて、トランプ側が非常に地道に特に接戦州での法改正を、より厳しくやっていたんですね。署名の一致、要するにデータの署名と郵便投票との署名の一致を厳しくするとか、ジョージア州とかで、いくつもやってきたことで、要は、かなり、ある程度は防げたというのが現状で、本来であれば、それが無かったら、もっと大勝ちしててもおかしくなかったと、私は思っているんですが…」

水島「なるほど」

山中「そういうことが起きたんですね」

水島「うん」

山中「これは全体像で言うと、私のアメリカの非常に仲の良い友人達と、ここ最近、よく話

すんですが、保守系の彼らが言うには、何故、勝ったと思った時の最初の反応が、アメリカ人はこの4年間で疲れ果てていたと」

水島「なるほど」

山中「もう我慢がならないぐらいまで、ここまで、こういう表現を、よく使いますけど、首のところまで来て、もう爆発寸前まで、経済ですね、インフレと一般の人々が、それ程、苦しんで来たということを、ハリスとかバイデン側は、まるで経済はいいみたいなことをずうっと言って来たし、それに対して、今回は大鉄槌というか、従来ならば、ずっと民衆党に投票して来た黒人層、スパニッシュ層、或いは、特に若い人が今回、かなり大幅にトランプに動いているんですよ。

これは、やっぱりイーロン・マスクのXの影響が非常に大きいと思いますし、本来であれば、ほぼ共和党、トランプなんかに入れないような、要は、ロバート・ケネディ・ジュニアをサポートする人達が相当、入ったっていうことになる、本来は無党派層で、トランプ、共和党に入れない人達も大同で団結じゃないけど、どんどん、いくつもの新しいメンバーがイーロン・マスク、ケネディ、まあ、そういった人達ですよ。タッカー・カールソンですとかね、だから、あれだけ人気のある人達が続々と入って来ていますね。

選挙に勝つような方法で Three M、3つのMというものがあります。一つは Message、二つ目が Messenger、三番目が Money ですね。メッセージは政策ですよ。トランプが非常に、上手く、その経済でインフレに絞って、国民の民意を、まあ、日本で言うと、国民民主党みたいな手取りを上げるというね、あれと似たようなものでやった。ただ、それに対してハリス側が、やっぱり、かなりジェンダーのところ、LGBTとか…」

水島「そうですね」

山中「ええ、そっち側で、そして女性の差別、そして何と言っても中絶というところに絞って、これは確か女性は保守系でも中絶に関して言うよね、こっちに賛成っていう人が多いから、女性の7割ぐらい、そこの支持は集めたんですが、結果的に投票には結びつかなかったという分析も出ているし、だから、私はヒラリーと似ているなあと思ったのは、あの時、ヒラリーは本当に勝つ予定で、勝つ話ばかりでしたけれども、あの時、完全にオバマがやった戦略をそのまま、つまり、黒人も女性も取れるはずが、ほぼ思ったように取れていなかったっていうのが今回のカマラ・ハリスだったような気がしているんですよ」

水島「なるほどね」

山中「ええ。ですから、それはメッセージ。だから、メッセージャーは、まあ、タマが悪いっていうやつですね」

一同「うん」

山中「カマラ・ハリス、あれぐらいの（笑）おつむが、あの程度の人をですね、それも突然、7月には、バイデンが降りない、降りないって言っていたのを降ろさせて、挿げ替えちゃった訳だけど、時間も無ければ、準備も戦略も、まるで民主党側が出来ていなくて、まあ、金だけは集まりましたね。1ビリオンだから1千500億円ぐらい。トランプの倍以上、三倍近く集めたけれど、ほぼ全部、使い切っちゃって、300億ぐらい赤字になっているというとてもない話で…」

水島「凄いですよねぇ、はい」

山中「うん、その内の6割が従業員、スタッフへの支払い、給料ですって、これも考えられない話ですよ」

水島「何かビヨンセとか、ああいう歌手さんにも3億円とか5億円とかね」

山中「ええ、ええ、全部、合すると20ミリオンだから30億円ぐらい、払っていますね。だから、そういうことをやった割にトランプっていうのは、その三分の一ぐらいの予算だけで黒字にして、今回、しっかりマネージが出来ていたとか、メッセンジャーという意味で言うと、タマが悪かったっていうのも、最後のマネーも、そういうことで、共和党側は、非常にクレバーに寄付金を使ったっていうことだと思うんですよ。はい」

水島「はい、そうですね。有難うございます。確かにCNNの日本放送を聞いたら、トランプ支持者はトランプが好きだから入ると。ハリスの候補は、トランプが嫌いだからハリスにするって」

山中「はい（笑）」

水島「もう雰囲気が大分、違うってね」

山中「雰囲気が違う（笑）」

水島「今のタマの問題で言うと、その違いは大きいですよ」

山中「大きいですねえ」

水島「それと、やっぱり、これもCNNですけど、やっぱり、おっしゃるようにトランプが経済の話をして、それから、この4年間、幸せになりましたかって聞かれると、それでハリスの方も、お前がやったじゃないかと。何故、今、これから良くやるんだというんだって、あれは結構、説得力がある」

山中「あります」

水島「ね」

山中「ええ」

水島「一般的にも、おっしゃったようにね、3Mの問題で言うと、やっぱり負けるべくして負けたと言うんですけどねぇ、圧倒的だったですね」

山中「ええ、圧倒的でしたね」

水島「はい、有難うございます。では、大井さん、お願いします」

大井「はい。私もトランプさんが勝ってホッとしていますけれども、まあ、圧勝するだろうというのは判ったんですね。何故かと言うと、やっぱりアメリカの友人に聞くと、その人はマサチューセッツ州の民主党の岩盤の所に住んでいるんですけど、最近、家々の立て看が、トランプ／ヴァンスって書いてあるもの、要するに共和党のものがバンバン張ってあると。

普通、あの辺は民主党の看板ばかりのはずですけども、そこまでアメリカ人が、もう目覚めたかってね、実質的に自分達の生活を成り立たせている、今、山中さんがおっしゃった経済、

それから特に移民の問題ですね」

水島「はい」

大井「その友人の小さなマサチューセッツ州の町にも不法移民の割り当てって言うんですか、何人かは、ここに住んで下さいみたいなのが来て、タウン・ミーティングをやって、大変に揉めたって言うんですね」

水島「なるほどね」

大井「ですから、そういう意味で、このままいくと、自分達のコミュニティが壊れるという物凄い危機感があってですね。それと、もう一つはハリスの、さっき山中さんも指摘されたようにジェンダーの問題とか、あまりにも過激過ぎると。性転換をバンバン、やりましようとか、もう普通の家庭の人にとっては、とんでもないことを言うなど。田舎のアメリカって、静かな田舎町へ行くと2千人、3千人の小さなコミュニティに住んでいて、ちゃんと教会へ行くとか、それなりに信仰があって暮らしている人達の中で、いきなり、ああいう過激なことを言うと、逆に自分達の宗教を圧迫されているっていう…」

水島「ああ、確かにそっちの方もねえ」

大井「イスラム教の人もユダヤ教の人もキリスト教の人も、それぞれ原理原則があって女性はどう、男性はどうって、そこまで否定されると自分達の信仰に政府が勝手に手を入れて来るっていう物凄い危機感もあったんですよ。それと、まあ、そういう意味で普通にコンセンサスに戻っていったっていうのが、私はアメリカがやっと普通になったなっていうところかなと思いました。でも、やはり、一番印象的だったのは、トランプ一人でどうのこうのというんじゃないくて、今回はイーロン・マスク、それからロバート・ケネディ・ジュニアと色んな人がトランプを応援して、ここでトランプさんにならないと、アメリカはどんなことになるの、どんな恐ろしいことになるのと、イーロン・マスクは自分の商売も出来なくなるとか、要するに経済活動の自由が無くなるんだっていうことを、はっきり言った訳ですね。

自分のXも無くなるし、スペースXも無くなるし、自分も逮捕されて牢屋に入るかもしれない、家族も危ない」と

水島「うんうん、言っていましたね」

大井「そこまで自分は危機感があるっていうところまで追い詰められて、本当に危機なんだということを実感したんじゃないですか」

水島「そうですね」

大井「だから、アメリカの憲法、国の成り立ちの原則に戻るっていう人達と、とんでもない方向に行くっていう人達と、それがグローバリストっていうか、よく解らないですが、まあ、そういう風に分断されたと。コンセンサスを持つ人達が大多数になったから、圧倒的な勝利になったということですね」

水島「なるほどね」

大井「何か、やっと元に戻って来たなあって、正氣に戻ったかっていう感じがしましたね」

水島「そうですね」

大井「はい」

水島「丁度、前の時代から、これもアメリカのメディアの報道だったと思いますけど、トランプは一応、経済政策とか移民の問題、色々採り上げて、いいのか」

大井「うん」

水島「ところがハリスさんの方は民主主義だとか人権とか、所謂、イデオロギーと言うか…」

大井「そうですねえ」

水島「さっきのジェンダーの問題も含めて、こういう思想とかイデオロギー、だからマスクさんなんかは、それに反応して生きていられなくなるみたいなね」

大井「うん」

水島「そういうような主張の違いも、さっき、山中さんが言っていたけど、そのメッセージの問題も、ああ、現実の問題と、そういうある種のイデオロギーみたいなね」

大井「はい」

水島「こういうものの戦いでもあったっていうかね、アメリカが元々持っている二つの要素かも分からないですけども、今、言ったようにトランプさんが勝ったっていうことなので。有難うございます」

大井「はい。有難うございました」

水島「では、藤さん、お願いします」

藤「前回、出た時もトランプが圧勝するって言って、私は逆に、これだけ物価高なのに、トランプさんの勝ち方が少な過ぎたっていうことで驚いているんです」

水島「ああ、逆にね」

藤「高々400万票。私は1979年のカーターさんが大負けした時より、もっと大差で負けると思ったんですけど、先程、冒頭の山中先生のお話をお聞きしたら、やっぱり、今回も不正があったんじゃないかっていうお話があって、何となくそれで納得したんですが、多分、まず、そこが驚いたっていうことと、それから選挙が終わってから、本当にトランプさんは、毎日のようにメッセージとしてニュースとヘッドラインを殆ど独占していますけど、やっぱりトランプ革命なんて言われ方をされていますけど、先程、大井先生がおっしゃったように元に戻った。もしかしたらトランプさんはトランプ維新、明治維新の維新をやろうとしているのではないかと」

水島「うんうん」

藤「それで、まあ、よく Make America Great Again と言ってアメリカを、もう一度、偉大にするって言っているんですけど、じゃあ、いつの時代かっていうことについて、私は、あまりイメージがなかったんですが、昨日、日経の夕刊を見ていたら、トランプさんに近い投資銀行家が、今のトランプさんのイメージの中の偉大なアメリカっていうのは1900年代ぐらいのアメリカだっていう言い方をしているんですね」

水島「うん」

藤「その頃って、まさしく 19 世紀から 20 世紀にかけて、工業生産でも世界一になってアメリカ例外主義」

水島「うん」

藤「しかも、例えば国の歳入構造を見ると、殆ど関税収入ばかり。所得税も法人税もゼロと。何となく、今回、高関税で関税をいっぱい取って、所得税も下げるっていうのは…」

水島「うん。それは、はっきり言っていますね」

藤「多分、1900 年、100 年以上前に戻るっていうイメージだとすると、何となくイメージが解かる。ですから、多分、関税の問題は、貿易の問題も勿論、あるんですけど、やっぱり収入構造を考えた場合、例えば国内の税を下げたら関税で取ると、相当、関税収入が上がるようですから、多分、それで、しかも小さな政府。その小さな政府っていうことで、まあ、イーロン・マスクさんとか、もう一人、名前が難しいから覚えられないんですけど…」

山中「ラマスワミ」

藤「ええ。あのインド系の共和党候補の方が入って、何か DOGE とかっていう政府効率化省という新組織のトップになるんですけど、あれは省じゃなくて諮問委員会ですよ」

大井「うん」

藤「省に入ると、やっぱり…」

水島「うん。ただ商務省の上だっていうね」

藤「えっ？」

水島「アメリカの商務省とかね…」

藤「いや、ただ、多分、諮問委員会ですよ」

水島「うん。上の扱いにするんだって言うんだけど…」

藤「いや、そんな制度はあり得ないので」

水島「まあ、どうですかねえ、あれねえ」

藤「はい。憲法上、そんな制度はあり得ませんので」

水島「う～ん」

藤「やっぱり、どうしても、その省に入っちゃうと利益相反で無理ですから、ただ、そういう諮問委員会って、おっしゃるように運用的には物凄い力を持つんでしょうけど、鵠的な存在になるということですね」

水島「そうなんですね。そこは、また議論出来たらと思っているんですけどね」

藤「ええ。あと、もう一つ、1900 年代のアメリカって殆どコーポレート・アメリカみたいなものですから、多分、企業経営的な手法を入れるっていうことで、色々尊敬できる先輩にお知恵を借りたんですけど、まず収入構造は、さっき言った輸入関税で、あとは地球温暖化規制を取っ払って原油の増産。あと保護主義ですね」

水島「うん」

藤「一方で従業員の雇用が減る可能性がありますから、移民を入れないと」

水島「うん」

藤「今、移民が入らないと人手不足で困るらしいんですが、景気が悪くなっても移民を排除すれば何とかなる」

水島「うん」

藤「更に言っちゃうと、連邦政府職員も大幅に切るんだということですが、正直言って、こんなことが出来るんだろうかと。私の念頭にあるのは、例えば、ショボいんですけど、前に民主党が政権をとった時、事業仕訳で15兆円減らすから何とかなるって、結局、出来なかったんですけど、やっぱり、私も役人だから、こういうバイアスがあるけど、民間が、やっぱりカリスマ経営者が誤解されるのは、民間企業と公的機関って違うんですよね。民間企業であれば、株主資本主義と言われてますから、今、株主にさえ利益が出ればいいんだということで非常に単純に出来るんですけど、やっぱり連邦政府、公的機関っていうのは、物凄く多様なステークホルダーが居ますし、その制度を実現するには物凄く色んな法律の縛りがありますから中々出来ないだろうと。

ですから、そうなれば財政赤字はどんどん増えていって、正直言って、長期金利がメチャメチャ上がりますから、多分、株は、いずれ調整局面に入りますけど、一番、心配なのは、前から言っている様に商業不動産が来年にかけて借り換え期に来ますから、大幅に潰れて、結構、アメリカは駄目になってしまう」

水島「うん」

藤「まあ、ただトランプさん自身は、今、取り敢えず、もう大統領選に勝った。それで彼は満足されているようですから、多分、実務的な問題は副大統領がやると言われていますので、彼は色々威勢のいいことを言って、取り敢えず、とにかく、今、民意を反映する形で物凄くオールスター・キャストで大臣とか長官を選んだあと、あとは、もう好きにやってくれと。君臨すれども統治せずっていう形になっていけば、結果的に何が起こるか。多分、世界はもう、アメリカを覇権国だと見なくなりますから」

水島「うん」

藤「そうなると、やっぱり第二次大戦末につくった、所謂、ブレトン・ウッズとか国連、それから、所謂、GOT、WTOですね、それからIMF、アメリカは、これらが全てアメリカ・ファーストだったら利用するっていう言い方をしますから、その国際的なインフラは全て棄損していきますから、多分、世界は、もう、とんでもない状態になっていくだろうということで、多分、想像できないんですけど、とにかく、これから凄いことが起こるだろうなっていう嵐の前の静けさを今、実感しているのが今日、この頃であります」

水島「そうですね。その辺、今、どういう方向になるか、ほんと、これから、また、あとで、皆さんとも議論したいんですけど、やっぱり出ているのが、まあ、ちょっと考えているのはアメリカ・ファーストっていうのが、つまり世界で自前で自足できるのは、アメリカとかロシアぐらいしかない。食糧からエネルギーから軍事からね」

藤「はい。そうですね」

水島「これは亡くなられた西尾幹二先生がよく言っていた話ですけど、アメリカは建国以来、一度たりとも国民国家になったことはなかったと。常に一つの世界であったと。トランプが、これを連邦主義的な形にするのか、今言った小さい政府的な形でやるのかって、もう昔からアメリカは建国時代、二対立があったんだけど、本当にそっちの方に行くのか、私なんか、どっちかって言うと、アメリカだけは自分達だけはいいいと。あとは、みんな、全部、グローバリズムで徹底的に潰していくと。植民地にはしないけども間接投資をして、アメリカ・ファーストという世界の覇権を、もう一回、多極の中でロシアとか、そういう自前で出来る所は残しながら、日本やドイツみたいな国を、みんな、吹っ飛ばしていくっていうような感じを、実は心配しているんですけども」

藤「いや、全く同感で、覇権国の責務はコストに過ぎませんから、そんな、要らねえと言って、ちゃぶ台返しをしたら国際社会は大混乱と」

水島「そう思うんですよ」

藤「はい」

水島「戦争とかなんか自分達はやらないと。金儲けと得になる事しかやらないというね」

藤「うん」

水島「あとは圧力で経済力や色んなものでというような感じ、だから凄い、みんな、バラ色の世界では全く無いっていうね」

藤「はい」

水島「そういう感じ、イメージがあって、皆さんの意見を聞きたいっていうのは、その辺もあるんですけども、はい、有難うございます。では、福井さん、お願いします」

福井「はい。僕が言おうと思ったことを藤さんに、かなり言われてしまったんですけど、まず意外に接戦だったっていうのか、やっぱり今回の選挙でアメリカの圧倒的な政治的な安定度」

水島「うん」

福井「例えば、今回、得票率で不正があるのかもしれませんが、得票率でみると50%と48%だから大接戦なんですよ。例えば、この前、イギリスで保守党が大敗したっていうのは本当に大敗で、得票率が20%減ったんですよ。労働党が勝ったっていうことになっていますが、労働党は、その前の選挙の得票率が殆ど動いていないんですね」

水島「ああ～」

福井「30%ぐらい。30%の得票率で議席は6割以上、取るというね、これは小選挙区制の凄い欠点ですけども…」

水島「ああ、そうですね」

福井「それに比べると50と48」

水島「うん」

福井「議会選挙を見てみたら、例えば、全部、凱旋した下院」

水島「うん」

福井「これねえ、435議席あるんですけど、ほぼ決まりましたが、共和党から民主党、民主党から共和党に移ったのは20も無いんですよ」

水島「ああ〜」

福井「もう殆ど前と同じ。だから勝ったって言うのか、負けたって言うのか、もう殆ど一緒。上院議員選挙も今回、接戦州が7つ、あったんですよ」

水島「はい」

福井「ね。そこで全勝した。大勝って言っていますけど、その内5つ、上院議員選挙があったんですけど、4つは民主党が勝っているんですよ」

大井「うん」

一同「う〜ん」

福井「だから本当に接戦だったんですね。大勝というんだったら、藤さんがおっしゃったように、もう民主党は当然っていう選挙区も州も勝たなきゃおかしい訳ですよ。例えばバージニア州とか」

一同「うん」

福井「そういう所ですね。結構、接戦、まあ、接戦っていうか、かなりトランプの票が出ましたが、でも、やっぱり民主党が勝つと思われた所は全部、勝っていますからね、ちょっとしたことで動くんじゃないかと」

水島「うん」

福井「投票率で言うと、トランプは前回で2%程、増えただけですから」

一同「うん」

福井「だからね、アメリカ人っていうのは、日本人以上に殆どの人が政治なんか興味ないんですよ。自分のことしか、まあ、僕も自分のことしか興味ないんですけど（笑）」

一同「（笑）」

福井「で、殆どの人そういうパターンが決まっていて、こうやって議論をしていっても、そんなのに影響される人は本当に10%も居ないんじゃないかっていう気がしますね」

水島「なるほどね」

福井「ああ。（笑）っていうことです。すみません（失笑）」

水島「まあ、でも、その数字、聞いてみるとね」

福井「ええ」

水島「確かに結果の姿と、ちょっとね、ずれがありますよね、やっぱりねえ、う〜ん。はい、

有難うございます。では、石田さん、お願いします」

石田「はい。まず選挙に関して言うと、山中さんがおっしゃったように、やっぱりアメリカの国民がインフレと移民問題とかで色々と押し潰されそうになっていたのを気づいて動いて、その結果が今回の選挙結果だったと思うんですけど。日本は未だ、その眠りから覚めていないという状況で、ちょっと羨ましいなと思いながら見ていたんですけど。何事も無ければトランプさんが来年、大統領になりますよね」

水島「はい」

石田「それでトランプさんが大統領になったら、皆さんも今、お話の中であったように、トランプさんは自国ファーストでアメリカの利益を追求するという、そこは揺るがない訳ですよ。そしてマニフェストでもおっしゃったように、ディープステートを潰すということを言っていますけれども、そうなると、今度、僕が今、注目しているのは、トランプさんの大統領就任後に、まず真っ先に向かう一か国目の外遊先は何処なのかということですね。僕はサウジアラビアだと思っているんですよ」

水島「うん、うん」

石田「サウジアラビアのムハマド・ビン・サルマンとトランプ大統領っていうのは盟友の仲ですし、トランプさんは、さっき言った様に利益を追求する、アメリカの国益を追求するという意味で考えると、サウジアラビアを中心に中東っていうのは、武器を中心としたアメリカの製品を沢山、買ってくれる市場であるのと同時に、トランプさんは自国の石油とガスを生産するでしょうけど、どう考えたってサウジアラビアから買って来ちゃった方が安いんですね」

水島「うん」

石田「アメリカの製造業を育てていくという観点で見ると。だから、そういう意味では、やはりアメリカもサウジの石油を欲しがっているので、トランプさんの政策に、かなり近いところに居るのは、サウジアラビアをどう動かすかということですよ」

水島「うん」

石田「そうなると、サウジに一か国目の外遊先として行くのかなあっていう僕の予想なんですけど、ひょっとしたらロシアに行くかもしれないっていうのも一方であるんですけど、まあ、いずれにしてもトランプさんの目というのは、もうグローバルサウス側に向いていると思います。トランプさんの考えで言うと、アメリカに国益を齎す国とディールをするという考えで動くでしょうから、そうなると、もうG7とかNATOとかWHOとか国連とか、アメリカに一切、利益を齎さないですからね」

水島「うん、恐らく、そう思っていますね」

石田「トランプさんは、そう思っていますね。何の為に金を払っているんだって、トランプさんは常々おっしゃっているんで、だから、藤さんがおっしゃった通り、来年、物凄いドラスティックなことが次から次へと起こると思うんですが、ひとつはG7が無くなる。これは一つシナリオとしてあり得ると思うんですよ」

藤「そうですねえ」

石田「NATOも無くなる。場合によってはEUも空中分解っていうね。EUなんかは結局、アメリカ依存で、ずっと時間が経って来ていますし、日本も同様ですね。日本もアメリカにとって、じゃあ、どれだけの利益を齎してくれるんだっていうことを、トランプさんは突きつけて来ると思うんですよ」

水島「うん」

石田「これをね、今の日本で言うと、本当にバイデンの時よりも、更に状況が悪化するっていうシナリオも考えられる」

水島「そうですね」

石田「トランプさんはビジネスマンでディールをしますから」

水島「厳しいですよ」

石田「そう。金を払えと」

水島「うん」

石田「金を払えって言われた時に、日本側が、いや、日本は、こういうことをやりたいから、アメリカにも、こういう国益を齎すから、こういう取引をやろうよって、ちゃんと交渉できる政治家が居れば日本も救われるんだけど、居ないじゃないですか」

水島「はい」

石田「残念ながら今の政権は、アメリカに言われたことだけを、はいはい、はいはい、言って、もう、どんどん、どんどん言う事を聞くだけの政権だから、そうすると日本はどんどん悪化していくと思うんですね。それで、あと、トランプさんとバイデンさんの外交の大きな違いを一言で言うと、バイデンは圧力でトランプは交渉なんですよ」

水島「うん」

石田「バイデンの中東への圧力というのは、この4年間で中東の国々を凄くグッチャグチャにしてアメリカへの不信感っていうのを最大限つくってきちゃいましたから。でも、逆に、トランプさんは、さっき言った様にディールをする訳ですよ」

水島「うん」

石田「取引をする訳ですね。アメリカにも利益があるように、サウジにも利益があるように、場合によってはイスラエルにも利益があるようにと。トランプさんは福音派ですから、イスラエルをサポートしてイスラエルを何とかするって言っているんだけど、じゃあ、どうやって、このイスラエルの戦争を止めるのかっていうところも注目だと思うんですよ」

水島「うん」

石田「誰にも止められないネタニヤフ政権を、果たしてトランプさんは、どうやって止めるのか」

水島「うん」

石田「これは、もう僕の希望的観測も入っているけれども、飛び道具を持っていると思うん

ですね。もう何かしら絶妙なアイデアを彼は考えているんじゃないかなあという予測なんですけど、どういうやり方か、今のところ、想像がつかないけど、前にも桜の方で話した時に、このネタニヤフ政権、ネタニヤフ首相っていうのは戦争を続けるか刑務所に入るか、どちらかですよ。結局、刑務所に入らないでネタニヤフの身を守るといような、そういったシナリオで戦争をやめることが出来るという、そういうストーリーがあるならば、ひょっとしたらトランプは戦争を止めることが出来るなど。そのねえ、一つ、きっかけになっているのが、僕はサウジだと思っていて、サウジとの関係を凄く強固につくることで、サウジを巻き込んでネタニヤフ政権を止めさせるっていう何か、そういうアイデアが、ひょっとしたら、あるのかもしれないなあっていう予想ですよ。予想ね」

水島「うん」

石田「そういう、まあ、結構、誰も想像つかないようなシナリオで、この戦争を止める可能性は充分、あるんだけど、逆に止められない可能性っていうのもあるんじゃないかなあとも思っています」

水島「そうですね。行くところまで行っちゃうみたいなね」

石田「そう。行くところまで行っちゃうというね。それで、あと、もう一つ、ちょっと大胆な予想をさせて貰うと、もう年末だから、いいですよ。来年の予想っていうことでね」

一同「(笑)」

石田「アメリカはブリックスに入ると思いますね」

藤「ああ～」

石田「かなり大胆な予想だと。そんなのあり得ないでしょうって、今、視聴者の多くの方が思っているかもしれないけど、いや、そのあり得ないことが起こるかもしれないっていうのがトランプのミラクルですね。これまでも何度も何度もそういうミラクルがあったと思うんですけど。WHO脱退だってイラン核合意離脱だって、どう考えたって、もう国際社会からしてみれば考えられないんだけど、でも結局、全部、一致しているんですよ。アメリカの国益になるかならないかなんですよ」

水島「そうね」

石田「もうトランプさんはそれだけで判断しているので、そう考えたら、どう考えてもG7よりもブリックスの方がアメリカの国益になるんです」

水島「将来的に見るとね」

石田「そう。だってトランプさんが言っているのはアメリカの製造業を発展させて、もっともっと輸出していく為に、ドル安を好んで、それでアメリカの製造業を発展させていくっていうことを言っている訳なので、そうなると、アメリカの製品を沢山、買ってくれる国々とか地域とか、尚且つ、購買力も成長している市場って言ったら、まず筆頭格で出て来るのがインドですよ。インドの14億人の市場にアメリカ製品をドッカァンって売りつけるような事とか、もう一方で成長して人口の多い地域で、ある程度、多いって言ったら、まあ、中東もそうですけど、だから、中東も元々アメリカ製品を沢山、買ってくれる市場ですから、そこの関係も、ひょっとしたら深めていくっていうのは考えられるでしょうし、あとは、

プーチンさんとも連携するって言っているし、トランプさんの言っている事、一言、一言、並べていくと、どう考えてもブリックスの方がアメリカにとっては国益になるんですよ。

だから、そう考えたらアメリカはブリックスに入るのかもしれないなあという、そういう大どんでん返しも待ち受けているんじゃないかっていうことで、だから、日本は、そこで本当に変わらないと駄目ですね。トランプさんが向かっている方向と、残念ながら今、真逆を向いちゃっていますから」

藤「(笑)」

水島「そうですね。日米安保の進化とかね(失笑)」

一同「(苦笑)」

水島「何十年前に言っていることを言っていますけどね」

石田「そう、だから、そこはアメリカとも連携が必要だけれども、アメリカべったりではなくて、まあ、日本もね、アメリカ、トランプさんが考えているような国益を追求するっていうような、国民の豊かさと国の利益を追求する日本の政権、政治家が出て来ないと、うん、まあ、ヨーロッパと同じような感じで、どんどん衰退していくっていうことになっちゃいますよね」

藤「なるほど」

水島「冒頭に言ったアレクサンドル・ドゥーギン (Aleksandr Dugin) っていう人は、私が最近、割と注目している評論家ですけど」

石田「うん」

水島「石田さんと似た事を言っていて…」

石田「ああ、そうですか」

水島「さっき言った様に、所謂、ブリックスとかね、グローバルサウスの人達と争わない形で支配出来るようにするっていうのね」

石田「うん」

水島「まあ、これ、アメリカ的な言い方ですよ」

石田「うん。うんうん」

水島「ただ、そういうような形でやっていて、今、言ってくれたようにG7とかこういったものに価値を置いてないんじゃないかっていうね」

石田「うん」

水島「まあ、勿論、一定の価値は今までであるから、ただ、おっしゃるように、そういうものの自体が、もう役に立たない、金ばかり使っしょうもない、何の役にも立たないっていうような形で見る可能性が凄くあるっていうね」

石田「うん」

水島「それと、これは、まあ、あとで出るかも分かりませんが、一応、このブラフとか打ち上げ花火かも分かりませんが、マスクさんがFRBの廃止を言った議員のあれに『いいね』と入れたっていうのはね、まあ、本気で言ったかどうかは判らないけど、ただ、これは、ある意図があって、こういうことを言ったら騒ぎになるっていうことを判っていて、FRBというね、アメリカの一応、中央銀行ですよ。国営ではありませんけれども、こういったものにまで関係している」

石田「うん」

水島「そうすると、最近、ここで、私がずっと注目しているのは、やたらとJPモルガンの話が出て来る」

石田「はあ〜い」

水島「JPモルガンの会長が、トランプで良かった、良かったって言っている。そうしたら、ここで、今日のニュースだと、JPモルガンは、ダイヤモンドCEOは入閣せずと。トランプが自分で言ったとかね。つまり…」

藤「ダイヤモンドは民主党政権に入るんだったんじゃないですか」

水島「そうですよ。選挙の時は個人的けれども、公ではないけどハリスを応援するって言ってね」

藤「ダイヤモンドからすれば、絶対、トランプ憎し、ですからね」

水島「そうですねえ（笑）」

藤「ええ」

水島「まあ、つまり、そういった金融資本の親玉の一人みたいなのがね、やっぱり、こういう形でやっている。それからワシントンポストやウォールストリート・ジャーナルが、どんどん姿勢を変えつつあるというね。表面上かも分からないけど、こういうのも含めて、今、おっしゃった世界的な、我々が極当たり前に思っていたことが全部、ひっくり返されるかも分かんないっていう可能性は…」

藤「可能性はありますね」

水島「凄くある」

藤「間違いなく、ひっくり返ります」

水島「ということであります」

石田「もう一点、いいですか。もう一個だけ」

水島「はい」

石田「僕は昨日、青森から帰って来たんですけど、羽田空港から家へ帰るモノレールに乗っていて、モノレールの第1ターミナルの駅から、ネクタイを締めたサラリーマンが、結構、オジサンですけど、5人ぐらいモノレールに乗って来たんですよ。みんな、ネクタイをしてスーツを着て、マスクをしてSDGsのドーナッツ・バッジをつけているんですよ。全員ね。

そういう人がモノレールに乗っていて、僕はちょっと怖いなと見ていたんですけど、要は、そういう人達が良くないと、僕は思っている。そういう人達は思考停止に陥っている訳です。例えば百歩、譲って、それぞれご本人が、これからSDGsが大切なんだと。マスクもしなきゃならないんだと、本人の強い意志を持ってやっているんだったら未だいいですよ」

水島「はい」

石田「でも、そうじゃなくて恐らく会社からマスクをつけろとかドーナッツ・バッジつけろとか言われて、何も疑問を持たずに何も考えずにバッジをつけているんですよ」

水島「恐らくね」

石田「それが良くないの。その思考停止に陥って、上から言われたことだけをはいはいと言って、言うことを聞いている。例えば大企業のサラリーマンの方とか、政治家もアメリカから言われたことを…」

藤「役人とか」

石田「役人とかもそうですね。何も考えず、しかも彼らのお給料って減点主義でしょ。ミスをしたら減点されて、お給料が減っていくっていうシステムで、何かチャレンジして失敗するのを恐れるから、何もしない訳ですよ。要は、動かないのが身の安全を確保するというね」

藤「この30年、そうですから」

石田「この30年、そうですから、大きな組織ほどね、だから、それで、その結果、思考停止に陥っちゃって上から配られたバッジをつけて、みんなで、恥ずかしくも無くモノレールに乗って来る訳ですよ」

藤「でも、あの世界、僕は、ちょっと羨ましいですけど、逆に」

石田「なんでですか」

藤「私は今、それからハブられちゃっていますから」

石田「ああ、ああ。それは藤さんが、ちゃんとした正常な方だっていう…（笑）」

藤「いや、いやいや、やっぱり群れている人達が羨ましいところありますけど」

石田「ああ」

水島「その日本の停滞した雰囲気、よく表れているっていうかね」

石田「うん」

水島「うん、そういうことですね。はい。有難うございます。ではエルドリッチさん、お願いします」

エルドリッチ「はい。こんばんは。宜しくお願いします。私は今夜、三部構成で発言したいと思うんですけども、まず大統領選を振り返りたいという風に思っています」

水島「はい」

エルドリッチ「私は先々週から約10日間、アメリカの方に行って来まして、バージニア州、

ワシントン、ニュージャージー州、ニューヨークの方、どちらかと言えば民主党が強い所に周って行ったんですけれども、今回の選挙の結果について、私は全くビックリしていない。

つまりトランプの勝利は、もう、ずうっと前から予言していたんですけれども、びっくりしたのは勝たされた、勝たせたということです。つまり不正選挙が、もう実際に起きていた。そして、やはりディープステートの力がどんどん強くなってきた」

水島「はい」

エルドリッチ「だから、そういう様な民主党、ディープステート、IT企業等々が、一つの大きな組織になっているんですけれども、そういうような圧倒的な力があつたにも拘らず、トランプが勝てたのは凄いなあという風に思っています」

水島「なるほど」

エルドリッチ「そこで、今夜、ちょっと話があつたんですけれども、ハリスが何故、負けたのか。私は、負けたというより、トランプが勝利したのは、もう完全に証明されているんですけれども、もしかすると、元々2016年、2020年、そして今回、民主党が言われている程の支持が無い。要するに人工的な支持だった。4年前、水島社長、私、あと何人かで、かなり激しい議論があつたと記憶していると思うんですけれども…」

水島「はい」

エルドリッチ「不正選挙が無かったと発言した人が居た訳ですけれども、明らかに不正選挙だった」

水島「そうですね」

エルドリッチ「今回も色々あつたんですけれども、幸いに、それが大きな影響に及ばなかったようですけれども、私はワシントンに居る間、私の元大学生、当時は研究生だったんですけれども、彼は米政府の人間だった」

水島「うん」

エルドリッチ「それで、今、郵便省に勤めているんですけれども、彼は監察官として仕事をしている。先々週の金曜日、丁度、2週間前の今日、彼と朝食を一緒にしたんですけれども、彼が既に色んな事案がある。しかし、連邦政府は、それを取り調べることを禁止していたみたい」

水島「うん」

一同「うん」

エルドリッチ「うん。なので、彼は非常に不満があつたんですけれども、やっぱり色々あつたんですけれど、国民は、有権者の民主党離れと言うより、本来の活動、意見が言えるような雰囲気になりつつあると思う」

水島「ああ」

エルドリッチ「今回、トランプは言論の自由を保証するという声明も出すとか、やっぱり、長い悪夢って言うか、長い暗い時期から解放されつつある気がする。私は、これをある種の

革命と思っています。もしかすると建国以来、最も重要な革命の時期になっている。そうすると、どんどん変化があると思う」

水島「うん」

エルドリッチ「今夜の発言の後半には、トランプ政権が実際に何をするのかを色々紹介したいと思っています。最後の方は、日本にとって何を意味するのかをもっと詳しく述べたいと思うんですが…」

水島「そうですね」

エルドリッチ「今回の選挙が、やっぱり民主党が過去に不正をしなければ勝てない政党だったんですけども、今回は不正をしても勝てない」

一同「うん」

水島「ああ、なるほど」

エルドリッチ「だから非常に良い事だと思っています」

水島「そうですね」

エルドリッチ「あと、もう一つ、私だけではないんですけども、非常に多くの人達が、例えば無党派とか、まあ、ご存じのように、私は無所属で共和党でもなければ民主党でもないんですけども、今回は民主党のお陰で、私はMAGAになりました」

大井「(笑)」

水島「うん」

エルドリッチ「私だけではない。多くのアメリカ人達がそういう風になったという風に思います。具体的に言うと、例えば民主党が、所謂、Voter Shaming という誰に入れたかを批判する」

水島「うん」

エルドリッチ「そこで家族、家庭が分断したり、友達関係が崩れたりしていたんですけども、今後、それについて論文を書きたいと思っているんです。ケネディさんがそういうような発言もしていた。彼は『私は今回の選挙で多くの友達と家族を失った』しかし、今、彼は、MAGAの人達の前で『今より大きな家族を得た』という話です。恐らく多くのアメリカ人がそう思っている。基本的にトランプに入れた人達の共通している価値観が、私を含めて、愛国心、自由、要するに様々な権利や自由を大事にしている。

私は以前、この番組でも言いましたように、言論の自由が最も大事な権利だ。それが失われたら、もう戦えない状態になる。そこで皆さんも覚えていてと思うんですけども2019年の大統領選の予備選の時、カマラ・ハリスがトランプをツイッターからバン、検討すべきだという発言をしていた。

最近、カマラ・ハリスがYouTubeを始め、そのPodcastを禁止すべきという発言している。トランプがアメリカで非常に人気のPodcast、ジョー・ローゲンの番組に出たんですけども、カマラ・ハリスにも招待されたんですが、彼女は出ようとしなかった。しかも他の沢山

の番組に出ようとしなかった。要するに議論とか討論とか自分の考え方を中々説明できない。何故なら考え方が無いから。もうパァ～、空白になっている。

それに対してトランプは明確な政策を次々打ち出していた。だから私は、今回の選挙の結果が正直、本当に嬉しいし、解放されたという風に感じている。しかし就任するまでは、まだまだ色んな手続きがあるので100%、安心は出来ないのは理解して戴きたいと思います」

水島「そうですね」

エルドリッチ「以上です」

水島「はい、有難うございます。エルドリッチさんがおっしゃったように、次はトランプが何をするか、そして日本はどうなるのかっていう流れで、我々も議論してみたいと思っているんですけどね。今、言った様に、そのハリスさんの問題っていうのは、今迄、アメリカが抱えて来た問題が表に出たっていうようなこと、それから、やっぱり、冒頭に山中さんがおっしゃっていたように、やっぱり耐えに耐えて来たのがね、そういう物価高とか、いや、私ね、アメリカの友人なんかも、やっぱり、どんどん上がって、中産階級の人、どんどん下に落ちていく。

自分達が真面目に働いているのに、どんどん貧乏になっていくっていう意識が凄くあったっていうね。それはトランプの方へ行くっていうことは、正直、あったと思うんですけども、同時に私が大変、面白く思ったのは、あとで議論すると思いますけど、石破内閣自体がね、ああいう、どさくさに紛れてやって、それで言っている事がコロコロ変わって、直ぐに選挙をやってみたら、はっきり言うと不信任ですよ。不信任されたのにも拘らず、まだ居座って、また、これからやると、参議院まで、もつかどうかとかいうのがあるのと、もう一つは、やっぱり、どうも日本の国民の要望や色んな意識とは凄くかけ離れたところで政治が動いている。

今回の場合も、まあ、これは当たるか当たらないか判らないけれども、立憲民主党の安住淳さんが予算委員会の委員長になったっていうのは、現実的に森山さんとツーカーですから、完璧に立民との実質上の連立で伸ばそうとしているんじゃないかみたいなね、涙目男も居ましたけども、それよりも、やっぱり立民とのあれっていうのは、意外と野田さんと石破さんは殆ど思想は変わらないっていうね、思想もあるのかどうかって言われると困るんだけども」

大井「(笑)」

水島「立場が似ているというね。もう一つは女系天皇論でも二人共、共通しているところが凄くお持ちになっているんでね。そういうところがあって、日本の政治が、さっき、石田さんが言ってくれたように、もう何周遅れのトップランナーみたいなね」

藤「(笑)」

水島「何十年前のような認識で、まだアメリカとずうっと付き合おうとしているのかっていうのは、向こうも見抜いていると思うんですよ。本当に何か、凄まじい恐ろしさを感じるんですけども、今、トランプ選挙の問題がありました。ざっくり言って、アメリカの、所謂、トランプさんが言っているファーストですね、アメリカ・ファースト、Great Againというね、この問題っていうのは具体的には、どういう形で流れて行くんだろうというね。

それと、私が注目しているのは、バイデン政権の時、こんなに速く次政権の組閣を、あっと

言う間に、この1週間でバタバタ、バタッと決めるっていうね、このスピードは一体、何なのかというのと、さっき言った様にFRBの問題について、ちょっかい出すようなマスクの動きとかイランの国連大使と会ったっていうのも態と出しているはずですよ。ということは、現実的に言うと、かなり緻密にやっているっていうのと、もう一つ、それまでネオコンとか色んなものを支配して来た、今、ディープステートと言ってくれましたけど、最近、実は日本テレビとか、ああいうところが平気でディープステートと言うようになったんですよ」

石田「え～」

水島「この間、日本テレビのニュースの解説を観ていたら、出ていたゲストがディープステート、ディープステートって言うんですよ。だから、ああ、やっと、ここまで来てくれたかというね、まあ、その定義は色々あると思いますけれども、そのぐらいトランプ現象っていうのはね、トランプさんは大統領時代も、それを言っていましたけどね。

こういうのが影響を受けているんだっていう感じがしたんですけども、さあ、今の認識、皆さんの意見を踏まえて、アメリカのトランプ政権っていうのは、どういう方向に行くのか、さっき、ちょっと石田さんも言ってくれましたけど、私もそこまで行く可能性が凄くあるっていうかね」

石田「うん」

水島「G7なんて、もう有害無実化するというかね」

石田「うん…」

水島「こういうことだって、トランプ的に考えるとあり得る。まあ、直ぐにとは言わないけどね、そう思うんですけど、じゃあ、また、山中さんから、その辺のご意見を伺いましょう」

山中「はい。今日ね、先程、エルドリッチ先生が言われた今回のこの選挙、この動きというのは、私の近しい友人も、本当にアメリカの独立戦争以来の革命って言ったんですよ」

水島「ああ、やっぱりね」

山中「だから独立戦争は戦争で血を流したけど、今回は血を流さないけれども、アメリカ人が、ある意味、独立革命をやったという、それぐらいの大変化が国民の中に起きたと。で、そういう風に考えると、今のトランプの動きは全然、おかしくなくて、よく見えて来るんですね。彼が今まで、ずっと言って来たことを、彼は今回、実行して、そして、民意がそれに伴って、だあ〜っと動いた訳ですから、まあ、ふ何とか選挙のことは、またバンされたりすると問題なので言いませんけど、確かに民主党は前からずうっとやっている、2016年もやった」

水島「やっていますよね」

山中「ええ。それでヒラリーが甘く見たんでしょ、トランプなんか勝つ訳ないだろうって、それね（笑）、だから甘く見て負けちゃったけど、2020年は大盛りに盛っちゃった訳ですね」

水島「そうですね」

山中「それで、とんでもない数が。でも、今回もやっている訳だけど、僕がずうっと言って

いたのは、それより遥かに、かなり取れば、その仕掛けがあっても勝てるだろうということで、実際、それが起きたと思うんですね。今、水島社長が言われた今後、どうなるかというトランプ政権を占うに当たって、やっぱり組閣人事だと思うんですよ。ここ数日来で続々とね、ここに何枚かのスライドを用意しましたので、出して戴ければと思うんですがね」

水島「はい」

山中「今、これ、ちょっと数日前のものですがね、13～4人のね、左端の Chief of Staff というのが首席補佐官の Susie Wilds っていう、全く一般には知られてこなかった女性ですが、キーパーソンですよ。彼女はフロリダの方の共和党で、ずうっと良い選挙戦を創って来た人でトランプ・キャンペーンの最大の責任者であり、一番の功労者ですね。これで今回、この首席補佐官という重要な職に就いて、ずらっと発表になっているんですが、それは国境の移民局のトップに最強硬派のトランプ前政権時代の人を入れたとか色々あるんです。

全部、紹介すると時間が無いので、いくつか安全保障ということだけに絞って、決まった人事だけを見て行くと解り易いと思うんですが、マルコ・ルビオですね。僕、4～5人を挙げますが、その中に敢えて年齢を入れたんですね。マルコ・ルビオは、ご存じの方が多いと思います。というのは、2016年のトランプの時の予備選の候補者ですから、当時は、まだ、非常に若造だったんだけど、ディベートでもトランプにコテンパンにやられちゃって、まあ、Little Marco って言われちゃってね（苦笑）」

一同「（笑）」

山中「まあ、背が低いからね。そういうこともあったんですが、そのトランプ政権時代も、この4年間も非常に強力に、いつもトランプを支持して来ましたし、外交では特にチャイナに対して、この上院の中では非常に強硬な人間の筆頭です」

水島「そうですね」

山中「ええ。いつも非常に厳しく、例えばアメリカにある孔子学院とか、様々な大学でアメリカの知的財産を盗んでいるとか、筆頭になって強硬なあれを進めて来た人が、今回、国務長官になったと。ベネズエラや様々な他の共産国、独裁政権に関しても非常に厳しいし、間違いなくトランプの言う事をしっかりと聞いて、通商交渉は別途、ライトハイザーなんてね、まあ、自動車交渉の時の凄いタフ・ネゴシエーターって、あの人のこともあるけれども、彼も、後押しをする側でしょうし、日本との経済交渉以外の安全保障なんか、この人の下で出て来る人達になると思うんですね」

水島「そうですね」

山中「そういうことで、まず国務省は、しっかりと固めたようですね」

水島「はい」

山中「これが、皆さん、一番、驚いた一人だと思うんですよ。実は、私はFOXで、しょっちゅう観ていたのでよく知っているんです」

水島「ああ」

山中「FOX NEWSの&フレンズっていう番組でインタビュアーをやるんですが、主に、ホストって言い方もしますがコメンテーター。非常に頭のいい感じの人で、元々陸軍でずっ

と勤務してイラクやアフガンでメダルも貰っている人物です。ただ将官にはなっていないんですね。現場の方のせいぜいコマンド、キャプテンぐらいですから、そうすると現場をよく知っているので、上層部に対して、特にペンタゴンの將軍達には非常に批判的です。これを、ずうっと行って来たんです。このバイデンの4年間もね」

水島「はい」

山中「それをダイレクトに番組の中でも言うし、トランプとも個人的に知り合っていますから、軍の改革についての色々なサジェスチョンを、トランプに対して、ずうっとやって来た人です。トランプは充分に意見を聞いて、彼ならいいだろうっていうことで指名したようです。軍の中で今、トランスジェンダーだとかジェンダー教育が物凄く蔓延っちゃっているんですよ」

水島「そうですね」

山中「もう私は、このアメリカの新聞、日本でも書いていますけど、恐ろしいぐらい、要は政権がバイデンでしょ。その前の前はオバマですから、とにかく、その時からどんどん、ジェンダー教育や、或いは、そういったLGBTだとか、黒人イコール犠牲者、白人イコール加害者っていう、とんでもない教育を軍の中でもやっていて、軍のモラルが今、ぐう~っと下がっちゃっているところに、このピートは、いつも、それに対して、これをやらせていてはいけないというようなことを、いつも言っていたんですが、FOXの番組の中でもね、もし、これを進めている將軍が今後、居たら、私は全部、クビ、Firedだって言ってね（笑）、そういうことを言っているぐらいですよ。ええ。年齢を見て下さい。40歳ですよ」

水島「そうですね」

山中「若いですねえ。それで、このマイク・ウォルツ、これも国家安全保障補佐官ですが、決まりましたねえ。フロリダの下院議員で元陸軍グリーンベレーで軍人です。私はこの7月、共和党大会に行った時に、彼が町の通りを歩いていましてね、会場の中で地方のローカルのインタビューを受けていましたが、私も傍で、ずうっと聞いていたんですが、非常に中々ですよ。フレンドリーだし、しっかりしているし、それだけじゃなくて、この人もチャイナ強硬派です」

水島「そうなんですねえ」

山中「ですから、まず、こういう人で固めていて、彼も未だ50歳ですよ。ねえ」

水島「うん」

山中「この方は前国家情報省長官、トランプ政権時の閣僚ですね。非常に重要なCIAから全部を統括するところの情報省長官の、まあ、当時から長官の補佐で代理だったんですけども、今回、CIAという本当に一番、要のところの長官になって、ここがディープステートの温床になっている訳ですよ」

水島「そうですねえ」

山中「ええ。保守派、或いはトランプ派をガンガン攻撃して訴訟に4件ぐらいもっていった色々な証拠を捏造したハンター、ハンター・バイデンのラップトップのコンピュータ、全部、あれは嘘だって言ったのがCIAですからね。もう、そういうものを一掃しようということ

で、彼は、それ、やられて非常に実績も能力もある59歳、まだね、そんな歳でもない若い
ですね、50代。そして、ここですね、マット・ゲイツ」

水島「この人ね」

山中「ええ。これ（笑）多分ねえ、多分ねえって言うか、この人が多分、一番、上院で承認
を受けなきゃいけないんでね、上院の委員会の承認は、まず通らないという人が未だ、かな
り居るし、ただ、今の上院、今回は一応、勝ちましたからね。未だ今のところは所作ですし、
ここで通るか通らないかって言った時、今も民主から物凄い声で、つまり彼によって攻撃さ
れてきた人がいっぱい民主党の中に居て、民主党の一番、過激なJ6、1月6日事件の茶番
委員会だとか、あの辺がでっち上げた、いくつものあれでトランプを4件の起訴で、全部、
もっていった時の、それに対するトランプの最大の擁護者が彼だった訳です。ですから民主
党は、もう憎くてしょうがないですよ」

水島「でしょうね。これね」

山中「うん。物凄い弁の立つ弁護士です。なので、この人が司法長官というのはFBIから
警察と検察の一番、上ですからね」

水島「そうなんですね」

山中「この彼が42歳ですよ」

水島「うん」

山中「この人、通るか通らないかは、また別です。承認があるんでね。一番、この人は遠い
だろうと言われているけども、先程の国防長官もそうですね。まあ、軍歴で四つ星将軍が、
ほぼ、なるところを、彼の様なせいぜい中佐、佐官級少佐のところで居た人は通らないと」

水島「うん」

山中「このトゥルシー・ギャバードも元々民主党のハワイ選出の3期ぐらいたった下院議員
で、非常に民主党では人気のあったスターでした」

水島「はい」

山中「彼女はスター。大事なのはね、この肌の色で、彼女はサモア系の血が入っているん
です。民主党で特に大事なのは、真っ白じゃ駄目な訳ですよ。やはり、そういった、いくつ
かのマイノリティの血が入っていて、そして軍歴がある。戦闘経験もある。そういう人が今
回、民主党で出て来たってということで大スターの扱いで、彼女も暫くやっていたけど、もう
愛想が尽きてトランプさんと会った時に、その時は離れてね、独立系だったんだけど共和党
に鞍替えしたと。この人も43歳。この国家情報長官。これも下に10人ぐらいの所謂、ス
パイ機関を抱えているCIAとかね、抱えている親玉ですから…」

藤「凄いですね」

山中「こういう人が出て来たってことです。ですから、これを見ると、国防長官、特
に国務長官、この辺が日本に対して、どのような安全保障をやっていくのかって言った時に、
やはり、私はね、もう他の方々もおっしゃっていますけど、私は全然、甘い見通しを持って
いないんですよ。厳しいと思います」

水島「うん」

山中「何故かという、トランプさんの考えが、やはり自前でやれよっていうことですから、そうすると、アメリカさんの、例えば、軍、兵器はバンバン買ってくれよ。これ、当然ですね。で、その為に、もっと金、今の防衛じゃ増額したって言うけど、まだまだ足りないよと。そして、今の基地をそのまま置いておくか置いておかないかも、これも彼は、はっきり放すでしょう。

日本側が前回、置いてくれっていうことで、そういうことになりましたけども、でも彼は、世界の米軍基地は、アメリカは引いて行くってことをずっと言っている人ですから、そういう中で、日本の今迄の自民だとか官僚は、もう、とにかく何とか居てくれと。金は、その分、出すからっていうことでやって来たけれど、果たして、それが今回もずっと上手くいくのか、地政学が前回、8年前とか、もう4年前と大きく変わっちゃってますんでね。

先程、グローバルサウスの話も出ましたがね、明らかに大きくロシアとチャイナが手を組んじやったって状況の中で、さてトランプと周りの外交安全保障のスタッフ達は、日本に対して、今まで通りバイデンでやったような、まあ、はっきり言って、あの人達が、日本を完全に植民地と見た屈辱的な主従関係で、あれは交渉なんて言えないですよ。主従の関係の押し付けに過ぎなかったから」

水島「命令伝達ということですね」

山中「命令伝達で。所謂、植民地総督があのお例のエマニュエルさんでね、ああいった態度。まあ、あれだけ内政干渉した大使なんて歴史に残るんじゃないかと思えますけれどもね、そういうことで今後、東アジアの安全保障のチャイナの問題にしても今、物凄く強烈に動いて来るし、今回の大統領がトランプになることで、また動くと思っているんですよ。

プーチンとの関係で言うと、間違いなくトランプは戦争をやめさせる方向でやりますから、24時間、48時間で直ぐに止まるということは無いと思いますが、取り敢えず、とにかく戦闘をやめろということを、第一優先で、英語で面白い言葉があって日本語で言うと『相手がNOと言えない条件を出す』って、これは、マフィアのゴッドファーザーの中に出てくる言葉ですけどね（笑）相手が絶対にNOと言えないオファーを出すと。だからNOと言えない。だから、それでトランプはディールの達人ですからね。

水島「そうですねえ」

山中「まあ、そういうことをプーチンなりゼレンスキーにも持って行き、且つ、イスラエルに関しては、更に何重も複雑ですけども、あれだけネタニヤフと近しい関係を持っている人ですから、何らかの落としどころで戦争をやめさせるというところを優先してやっていけるんじゃないかという気がしています」

水島「そうですね」

山中「はい」

水島「この今のトランプ政権の行方の大事なことの一つは、ディープステートとも関係がありますけど、ユダヤが中心になっている国際金融資本とかエネルギー・メジャーとか武器商人とか、こういうもの、それと、今、おっしゃっていたイスラエルのネタニヤフ政権との非常に親しい関係があるという時、まあ、鉄砲玉でやるとこまでやらせてクビにするっていう

ね。もっと言えば、あの閣僚が昨日ですか、レバノンの西岸ですね…」

藤「ヨルダン川西岸の地区」

水島「西側を併合するっていうね」

藤「そうですね」

水島「それから、さっきも言いましたけど、ガザ地区の真ん中に回廊を造って、そこはイスラエルの基地にしちゃおうと。分断しちゃうっていうことですけどねえ。こういうようなことを、どんどんやっていくって言うので、バイデンさんはとめられないから、やるところまでやって、そのあとトランプに任せるみたいなパターンになると、ネタニヤフが辞めるとか何か色んな事故が起きるとかね、本当に分からないですけど、今、誰でも暗殺できちゃうからね。居なくなって、いや、トランプだって未だ危ないからね」

藤「危ないですね」

山中「分からないですよ」

水島「うん、でも、そういうことが、おっしゃったように、そういう流れを、やっぱり厳しい現実ですけどね、聞いているだけで日本はどうなるっていうのは（失笑）あとで話しますが、本当に考えちゃうっていうことで、今、おっしゃって戴いたんですけど、因みに、これは軍事討論でも出ていますが、日本には、もうアメリカの一線の部隊は殆ど…」

藤「居ないですね」

水島「居ません。居ないので事務的なものだけとか、たまに何か色々来るとかいう様な形で形骸化しているっていうかね」

藤「うんうん」

水島「チャンネル桜沖縄が調べたら、那覇とか軍港や色んなものに機材は全部、揃っているけども人は殆ど居ない」

藤「グアムですね。グアムに引き上げましたね」

水島「だから、今言った様に、いつでも引き揚げてオッケーになっちゃっているという状態」

藤「うん」

水島「だから米軍は日本に守りに来るとしても、3か月後にしか来られないと。いくら頑張っても本当に来る気になってね。第7艦隊も近づけないということになっています。そういうことを踏まえた対応しなきゃいけないですけどね。大井さん、いかがですか」

大井「はい、トランプが何を目指すかということで用意してきたんですけども、MAGAを推し進めますということで、それで山中さんもおっしゃったように、トランプは2016年、それから2020年も不正が無ければ勝っていたかもしれない。そして、更に2024年に勝利しましたから、実質的には3回、選挙に勝ったかもしれない」

水島「はい」

大井「そういう意味で、これからトランプ政権になりますけれども、本当に1月20日に就

任できるかどうかは未だ分からないと。それまでに何があるかも分からないし、暗殺とか色んなリスクもあります。或いは、反逆罪で捕まって何処か牢屋に入れられるのか、大統領資格を剥奪されるとか、色んな裁判上のリスクを抱えている訳ですよ

水島「決定は延びていますもんね」

大井「決定は未だだから、そこまで難しいんだけど、ただ、彼が退いたあともJDヴァンスが居ますから、彼がトランプの意志を継いでいくだろうと。だから、MAGAは続くと。それで山中さんがおっしゃったように40代、50代ぐらいの物凄く有能でやる気があって、そして護憲ですよ。アメリカのFounding Fathersの精神に戻ろうっていう人達がわぁと来て、今、内閣っていうか組織が出来上がって来ているので、このまま行くと、トランプさんは2028年には選挙に出ませんって言っているから、次は、ヴァンスか誰か他の人になったとしても2032年ぐらいまではトランプの時代でThe Age of Trumpって、ある評論家が言っていましたけれども、これが続くんだろう。続くと全く新しい世界観」

水島「うん」

大井「世界秩序も変わって来る。じゃあ、アメリカが何を指すかと言うと、非常に古典的なアメリカン・システムというのがあって、それがジョージ・ワシントンの時代、それから、アレキサンダー・ハミルトンとかね、アメリカが非常に成長した時の国民経済の政策っていうのがあって、それが4つ、非常に特徴的なことがあります。

第1に保護貿易主義です。だから、今から中国に高い関税をかけるぞっていうことを言っている訳ですよ。自分の国に製造業を戻して、自国産業を活性化して、それによって国民、労働者の所得を上げていくと。それとレーガンの時もそうだったんですけど、基軸通貨ドル、これを非常に大事にすると。だから、他国に高い関税をかけて、そうすると、逆に我々、日本にとっては、輸入品の物価が上がってしまうので、結局、アメリカは他国にインフレを輸出することになるんですよ」

水島「そうなんです」

大井「ドルが強いから自国には安い製品が入って来て、逆にディスインフレになると。で、こういう基軸通貨、ドルを使って関税をかけても自分達はインフレにならないで、他国にインフレを輸出するっていう『保護貿易主義』をやっていくと。

二番目に重要なのは『軍事力の強化』で、もう絶対的な優位性を確立する。自分達は、絶対、安全だ。安全保障を確保する。それから3つ目が『スマート・インフラ投資』っていうことで、アメリカは今、生成AIとか色々な新しいデータセンターを沢山、つくらなければいけないとか、そういう次の新しい産業構造に向けて、どんどん生産性の向上を目指す動きが始まっています。生成AIだけじゃなくて、それを使ってビジネスを創出していくっていう次の製造業の段階に入っているんですよ。これをやっていくと。

最後が、誰かおっしゃった『連邦中央銀行政府の改革』でしょう。これが非常に危ない。危ないって言うか、これをやろうとすると、リンカーンもそうですけどJFKのように狙われて、命を落とすという事になり得る。で、新しい中央銀行構想っていうのがあります。これは我々が今迄見て来た、中央銀行デジタル通貨とは全く違うものです」

水島「例えば、ドルに換わって自国発行通貨をやるとか、ケネディが、ちょっと、やろうとしたっていうねえ」

大井「そうですね。でもデジタルの形にはなっているんだけど…」

水島「よくビットコインの話をしていますよね」

大井「はい。ですから、そういう…」

藤「ビットコインなんか今、急騰していますね」

大井「はい、今、暴騰して、ちょっと下がってきましたけども、そういう全く新しい世界観と産業構造の変化ですね。それと新しい中央構造っていうことで、今、もう、どんどん世界が変わりつつある訳ですよ」

水島「そうですね」

大井「私は丁度、１９８０年代のレーガン時代と１９９０年代のクリントンの時代、アメリカに居ましたので、それを重ね合わせたような話が、もう３年、４年の間にガンガン進むんじゃないかと」

水島「なるほど」

大井「私は８０年代のレーガンの時代、ワシントンＤＣに居ましたが、当時は、日本が貿易戦争で虐められて大変な時代でしたね」

水島「そうでしたね」

大井「それが今度、中国に対して起こる訳ですよ」

水島「うん、うん」

大井「９０年代のクリントンの時代っていうのはＩＴ革命が起こって、で、インターネット・ハイウェイだとか、ドットコムだとか物凄く流行ったじゃないですか。今度は、それが生成ＡＩっていう次元の違うレベルでやってくるというように、どんどん色々な、今迄、我々が当たり前だと思っていたことが、アメリカでは変わりつつあると。しかも、今、スマート・インフラの話をしましたけども、新しい生成ＡＩで集めて来たデータ分析をガンガンしなけりゃいけないから、データセンターを沢山、創るぞと。そうすると電力は要るし、水も要るし、新しいインフラ投資が必要だと」

水島「うん」

大井「電力を起こすには、石油とかガスとか色々な物を総動員して原発までやるって言っている訳ですよ、アメリカで」

水島「スリーマイル島のもやるとか言ってね」

大井「復活するとか。だから、そういう意味では、もう国家資本主義っていうんですか、とにかく国をあげて国民経済を強くして、それによって強いアメリカ、ＭＡＧＡですよ。そして、それが主権国家として自分達の主権を守るような中で外交をしましょうっていうようなことです。だからディールをして、お互いにちゃんと話し合って、イデオロギーじゃなくて経済合理性をもって決めていきましょうっていう、まあ、商売人のやり方ですね」

水島「そうですね。どこかで、みんなでディールをする、取引するってことですね」

大井「みんなでディールする、取引する。だけど、それでも『勝った負けた』はある訳でしょう。だから一応、経済合理主義に基づく色んなディールは出て来るんだけど、アメリカとしては、やっぱり、何か、そういう意味で国家金融資本主義って言うか、帝国主義的な物凄く強い立場に立つっていう、まあ、そういう時代が The Age of Trump ですね。

私は実現していくんじゃないかなと思います。今、組閣のメンバーを見ても、皆さん、非常に有能ですよ。それで軍隊の経験があるでしょう。ある程度、そういう Discipline っていうんですかねえ、訓練を受けているし、それから知的な訓練も受けているし、政治家としての訓練も受けているし、日本のポツと出の二世議員とは違うんですよ」

山中「逆ですよ」

大井「逆なんですよ、叩かれて、叩かれて、のし上がった人達が 4～50 代で、だあ〜っと、ひな壇に並んでいるじゃないですか」

水島「ヴァンスさんが典型的ですよ」

大井「ヴァンスさんは 40 歳になったばかりでしょう。だから、そういう人達、俺達が国を引っ張るっていうね、力強いエネルギーを感じるんですよ。それは羨ましいですね（笑）」

石田「羨ましい。話を聞いているだけで、本当に羨ましくなる」

大井「羨ましくなる。だけど、日本にとって、じゃあ、それは、どういう意味なのかって言うと、これは、やっぱり厳しいから、我々はそれなりに若い有能な人をかき集めて対抗しないと駄目だなあっていうところですけど、じゃあ、その根幹にあるもの、何を我々は哲学として国を守るのかっていう、アメリカは、ほら、ちゃんと憲法っていうね、それと今迄の Founding Fathers のやり方だとかを踏襲しているじゃないですか。だから何かそういう風に、日本も一旦、原理原則に戻って、やり直した方がいいんじゃないかなと」

水島「うん」

大井「それでね、まあ、あとで、また話が出て来るんですけど、日本の政治について言うと、これから国際環境が全く変わります。G7 が無くなるかもしれないっていうのも、そうですけども、自民党と、それから日本の戦後の権力構造、この正当性が全く失われます」

水島「そうですね」

大井「ね」

水島「はい」

大井「だからガラガラポンっていえばガラガラポンなんだけど、じゃあ、そこから国民が、本当に何をしたいのかと」

水島「うん」

大井「このままだと中国に支配されまっせと。中国の租界になっているという話があるじゃないですか」

水島「うん」

大井「それにも気づかないで、それでいいんですかと。アメリカが守ってくれるって本気で

信じているんですかとか。そこを、もう一度、日本の人達がちゃんと目覚めて考えて、自分達は何をしたいのかっていうのを、一度、腹落ちしないと…」

水島「そうですね」

大井「政治家に、そういうことを伝えないと、ちゃんとやっていかないと駄目だと思います」

水島「いやあ、ねえ、本当に聞くと溜息が出て来る（苦笑）」

大井「溜息が出て来るけど…」

水島「でも、まあ、その通りですよ。はい」

大井「アメリカばかり、いい、いいって言うてもしょうがないので（苦笑）、勿論、暗い面もありますよ。経済は、一旦、物凄く落ち込むと思いますし、これだけ舵を切ったら、相当な repercussion と言うんですかね、それはあると思うし、痛みも伴いますからね」

水島「やっぱり、今、大井さんが言ってくれて、私も凄く意識しているのは、トランプは、もしかしたら愛国心っていうかUSAっていうことを、アメリカが最初からあったように州だけでバラバラでやっていこうと、連合体でやっていこうっていう建国の時と連邦政府として強化しようっていうやり方をやって、トランプは、もしかしたら、さっき、冒頭で、西尾幹二さんの話をしましたけど、一つの世界だった。これを新たにアメリカ的な国民国家としてね、もう一回、再生させて、他の所は全部、グローバリズムを押し付けていくっていうね、自分達の世界だけを豊かにする、強くする。

あとは損か得かでやっていこうぜ、みたいなね。極めて反共とか左だ右だとか、日本はアジアにとって、アメリカにとって大事でしょうとか、そんなセンチメンタリズムは、もう通用しないという世界に入って何処まで目指すかって言うと、さっき、おっしゃって戴いたように、みんな若い人達ですよ。

そうすると、絶対、分裂するかも分かんないぐらい、トランプが纏めればいいけど、最後は、ルビオが次になる、ヴァンスがやるのかね、いやあ、もしかしたらイーロン・マスクだって考えているかも分かんないというね。こういうような羨ましい感じがね（笑）、権力争いとか競争させる、それをコントロールするつもりで、ああいう形になっているっていう、年代から言ったら、だって平均60歳もいないでしょ」

山中「いやいや、もっと若いですね」

水島「もっと若いね。50代でしょうねえ」

藤「だから逆に心配なんですよ」

水島「だから、そういう野心とあれに満ちているからね」

藤「いや、16年前にオバマが勝った時、日本人が、みんな、同じことを言ったんです」

水島「うん、うん」

藤「若くて有能だと、アメリカは凄いんだって、保守系の方も含めて、みんなが言ったんです」

水島「あ、じゃあ、続いて、じゃあ、オジサン、続いて」

藤「だから私は正直、言って、トランプさんは、もう次になる必要が無いですから、もう、彼自身としては終わっちゃったと思うんです。だから君臨するとも統治せずと。取り敢えず、俺は、もうメッセージは出したと」

水島「うん」

藤「あとは勝手に刈り取ってくれと言って、調整するのは多分、ヴァンスさんでしょうけど、出来ない可能性がありますよね」

水島「うん」

藤「私は、やっぱり何度も言いますように、先程、大井先生がおっしゃった80年代も確かに意識しているけど、やっぱり100年前ですよ」

水島「う～ん」

藤「偉大なアメリカってというのは。今回は、返り咲いた大統領が132年ぶりっていうのも示唆的ですけど…」

大井「ああ、そうですね」

藤「100年前のアメリカって、図体だけは世界一になったけど、国際協調とか、国際的に貢献しようっていう意識が全くゼロですよ」

水島「うん」

藤「だから大きくなったばかりに、凄く身体は190センチになった中学生みたいなものです。多分、そういう状況が、アメリカがiiiっていうことで、それに戻りたいということと考えたら、何度も言いますように、ルーズベルトの4期から44年にブレトンウッズが出てから、ずう～っと80年間、アメリカ州の国際秩序が出来ましたが、でも、それが無くなっちゃうんですよ。だから、それは多分、想像できないんだけど、私は、それが一番、インパクトが大きいし、可能性が高いと」

水島「うん」

藤「しかも取り敢えず、俺はメッセージを出したと、あとは、お前ら、若い奴が、次の自分の失点の為に一生懸命、頑張れと言ってやらせるんだけど…」

水島「いえ、そんな、未だ生々しいんじゃないの（笑）」

藤「えっ」

水島「トランプは未だそこまで悟りきっていないんじゃないの」

藤「だって、もう史上最高齢の大統領って、次は無い訳ですよ」

水島「いや、あのしぶといバイデンだってボケながらも必死になってね、しがみついているあれやっているんだもん」

藤「彼は未だ再選しなきゃいけないっていう下心があったじゃないですか」

水島「うん」

藤「今回は１３２年ぶりの振り返りだから、制度上、次、無いんですよ」

水島「いや、だからねえ、まあ、その通りなんだけど、もしかしたら、その金儲けとかね」

藤「ん？」

水島「利権とかね」

藤「ん？」

水島「次の金儲けとかね、いや、利権だとか…」

藤「いや、もう、いや、もう…」

水島「どうだら、こうだらが…」

藤「いや、いい歳だから、もう、やりたくないでしょう」

水島「だから無いけども、ただ、その典型が青島幸男さんだったんですよ」

大井「(笑)」

水島「あの人は作家にもなりたかった。直木賞作家」

藤「だから…」

水島「やりたい訳じゃなかったってこと」

藤「だから最初に都市博をやめてから、もう何もやらなかったじゃないですか、あの人」

水島「ああ、だから都知事選にも、都知事になりたかった。でも都知事をやりたくはなかったっていう、私は青島幸男とは意地悪ばあさんで付き合っていたから分かるけど…」

一同「(笑)」

水島「トランプは、そういうタマじゃないですよ」

藤「いや、分かんないですよ」

水島「そこまで悟りきってね」

藤「いや、悟っていないけども、もう、いいと。あと、私は別に、そのアメリカを…」

水島「７８でしたか」

藤「もう７９で史上最高齢の大統領になりますから」

水島「うん、まあ、そうだけどねえ」

藤「うん、で、あと、やっぱり…」

水島「私は自分が７５だからね、言うつもりは無いけど、中々いい歳、こいたって未だ元気な奴は元気ですよ」

藤「分かりました。そこは見解の相違なので、もう、これ以上、議論しませんけど(笑)」

一同「(笑)」

藤「一応、御一新ってことなので」

水島「うん」

藤「100年前のアメリカ例外主義のアメリカに戻りたいんだけど、一番の問題はアメリカのデモグラフィー、人種行動が100年で変わっちゃったんですよ」

大井「うん」

藤「多分、2040年には明らかにマイノリティがマジョリティになりますよね。だから、多分、今は取り敢えず、報道は大部分がトランプさんの発表ばかりですけど、半数近い反対勢力は、やっぱり居る訳ですよ」

水島「うん。そりゃそうですね」

藤「彼らだって、アンティファを含めて相当、暴力的な集団ですし…」

水島「うん」

藤「やっぱり日本のメディアは報道しなかったですけど、トランプさんが2回目の暗殺未遂がありましたよね」

水島「うん」

藤「あの時、確か世論調査で民主党員の四分の一以上は、殺された方が良かったって回答しているんですよ」

水島「うん」

藤「だから、やっぱりトランプさんが物凄く嫌でしょうがないと、まあ、これはテレビでもやっていますけど…」

水島「そりゃそうですね。半分以上、居たらしいですけど」

藤「まあ、アメリカから移住したいっていう人もすごく増えているらしいですから、ある意味で、そういう物凄く不満の火種が溜まっていますから、ある意味で非常にヤバいんじゃないかと。それで、やっぱり、さっきの中央銀行の話ですけど、私は中央銀行を廃止する可能性があると思っています。何故かと言うと、トランプさんが尊敬するのは第7代大統領、アンドリュー・ジャクソンですから」

大井「そう」

藤「彼は最初に創った中央銀行を見事に廃止していますから」

水島「うん」

藤「しかもイーロン・マスクさんが中央銀行廃止って言ったのは、もうネタバレしてしまっていて、彼は仮想通貨で柴犬が何かをアイコンにしたドージコインって、まあ、確かに政府効率化省と同じあれなんですけど…」

水島「うん」

藤「ドージコイン、買っていて、それがバク上がりするということを狙った発言ですし、多分、あと、中央銀行なんて要らねえと」

水島「ただ、これね、中央銀行とかIMFっていうのは、中央銀行っていうかFRBとかね、あれ自体が現実的に、この20世紀のドルが第二次世界大戦後、中心的な基軸になっていったところに挑戦じゃないですか、ある意味で言う。だから、つまり、それまでやっていた、それこそディープステートの人達が簡単に、はい、ってね…」

藤「いや、出来ないですよ」

水島「認めるわけがないでしょう。だから、もう相当、これは、私なんかは何処かで妥協したんだろうと。本気でやる気はないけども、そういう形で影響力とかね、どんどん増していくと、実はトランプっていうのは割と過激に見えるけど、私は慎重だと思っている訳ですよ。戦争とか何かしないようにね」

藤「いや、だから、どちらかと言うと、私は丸投げするんじゃないかと」

水島「え？」

藤「丸投げ」

水島「うん、まあ、だから、それは、もう色々…」

藤「それから基軸通貨ドルについて、トランプさんは今、それを重要だと思っていないと思うんですよ。基軸通貨ドルって物凄くコストがかかりますから、だから、これまでは、保護主義的なことをやっていますけど、取り敢えず、建前は、国際貿易を拡張させましょうと。国際金融を何とかしようと言うけど、完璧に今度は本音、剥き出しの経済ナショナリズムになりますから、逆にアメリカが多分、基軸通貨ドルを維持したいと言っても、例えばトランプさんが関税かけるなんていう言い方をしていますけど、多分、諸外国の方からこんな通貨なんてっていうことでどんどん離れて行って、ただ、そうは言っても、人民元は絶対に受け皿にはなりませんから。ユーロも駄目です。多分、もう基軸通貨ゼロの時代が来ると。

1930年代と同じ時代が来るんじゃないか。私は、今日のお話で、皆さんの非常に示唆に富むお話で勉強になっているんですけども、一つ、違和感があるのは、多分、このトランプさんがやろうとしている事は凄く無責任で、一見、つじつま合わせで何かストーリーは出来ているんだけど、物凄い反対勢力があって、それが空中分解した時のカオスっていうことについての怖さが、僕は非常にあるんですけどね」

水島「なるほど、過大評価している」と

藤「はい？」

水島「トランプを」

藤「はい？」

水島「過大評価」

藤「私は、そう思いますけど」

水島「いや、そこが凄くねえ、見方を考えなきゃいけないところでね」

藤「ええ」

水島「ただ、まあ、それなりにすごい大統領だと思っているんだけど…」

藤「だって80年間も続いてきた制度を変えるって、相当、大変な事だと思いますから」

水島「なるほどね」

藤「しかも、これで最後にしますけど、明治維新だって、ご覧の通り西南戦争が終わるまでは殆どカオスでしたからね」

水島「うん」

山中「僕はね、4年間では無理だと思っているんですよ」

藤「うん」

山中「4年間では絶対に出来ない」

藤「うん」

山中「まあ、ある人によると20年という人も居るし、トランプ自身も、もっとかかるよと。いや、これだけガタガタになったアメリカ社会を、私の4年間だけで物凄く良くすることは出来ない。それは現実的には、そうだと思うんですよ」

藤「うん」

山中「あの人は現実主義者ですからね。だから、やっぱり、あの40代、50代の若手を据えてね。私が共和党大会に行った時、壇上に並んだのは、あの時、39歳のヴァンス始め共和党は次の次世代を見越して、どんどん登用して行って、この人達に重要な仕事を任せていく体制を既に創っているなって思ったんですよ。ミルウォーキーでやったんですけどもね。

その通り今回、勝った、そして勝ったあとに、所管の組閣名簿を見れば、ほぼ、その人達が中心で、まあ、50代、60代も、これから出て来るかも分からないけど、中心は違うんですよ。だから、その辺を見据えて、彼はやっているんじゃないかなって私は思うんです」

水島「でしょうね。まあ…」

藤「一言で言ったら、若気の至りって言葉もありますので」

大井「(笑)」

山中「ノーノー、いや、僕ね、若けりゃいいっていう話は全くしていないんですよ。何故かと言うと、ほら、カマラ・ハリスはバイデンと同じで、黒人ならいいんだと。女性ならいいんだでしょ。黒人と女性だって掛け合いしたら、それでカマラ・ハリスになっちゃった訳ですからね」

藤「ハリスは、かなり過小評価されていると僕は思っていて、それなりに立派なキャリアを積んで来ていますので…」

山中「うん。ただね、あの人は選ばれていないですよ。選挙で選ばれてない。副大統領の時もピックアップされたんですよ。つまり彼女は、そういう風に、何処でも、いつも与えら

れて来た人だから。そして最大限に女性とか黒人人種をアイデンティティ・ポリティックスの一番、中核に来る女性の、要は、例えば、男性に対して一番、強いものがありますよね」

藤「おっしゃる通りですね」

山中「ああいうものも徹底的に利用して、サンフランシスコの検事になる時の市長さんにね、もう愛人なんて、別に今では日本人でも、アメリカも別に珍しくないけれど、そういうことをやって、のし上がって来た人だから…。だから同じことです。何故かと言うと、歳が若ければいいっていうことは全く無い」

藤「うん」

山中「全く同意です。歳が若い馬鹿がいっぱい居るじゃないですか」

一同「(笑)」

山中「だから、全然、意味がない。50、60代でも、ちゃんとした70代でも経験があり、そして、非常にレベルの高い人達に、僕はミックスアップじゃないかなと思っているんですね。そうじゃないと、また、いけないとされていて、だから、それを、アイデンティティ・ポリティックスは絶対にトランプは執らない人ですよ」

水島「そうですね。そんなもの、年齢じゃないけども、どうですか、やっぱり、今、丁度、出て来たのは、トランプというのは、実は、それ程、高いあれじゃなくてね、権力が好きだとかいうような程度のレベルで、ある意味で、未来のアメリカとか、こういうところを見据えた上での、そういうものを考えている政治家なのか、とにかく、今度、勝って、こうやってやれたっていうものなのか、この辺で大分、未来のアメリカに対する問題…」

山中「そうですね」

水島「さっきも山中さんが言った様に、あの配置というか若手を起用してるっていうのを見ると、単に自分の都合でやっているんじゃないんじゃないかと、やっぱり将来、アメリカっていう、その国家なのか一つの世界なのかね、国民国家として目指すのか、これは色々あるけれども、やっぱり、ある未来を見据えてはいるんじゃないかっていうね、おっしゃったように自分は、もう一期しか出来ないから、まあ、やるつもりもないだろうけど」

山中「うん」

水島「というところですけど、福井さんは、この辺のことを含めてどうですか。トランプが、これから、うん」

福井「うん、私は個人の力っていうのは、やっぱり、こういう大きな国では、大した影響を及ぼすことが出来ないんじゃないかと思うんですね」

水島「うん」

福井「まあ、威勢のいいことを言っても、落ち着くところに落ちつくということではないかと思えますけどねえ。ただ、私はトランプが大統領になって一番、いいと思うのは、ディールの人でしょ」

水島「うん」

福井「だから価値観を押し付けて来ない」

水島「うん」

大井「そうそう」

福井「同性婚を導入しろとかね」

藤「(笑)」

福井「天皇は女でもいいだろうとかね」

水島「うん」

福井「そういうことを言って来ないっていうのは、凄く大きいと思います。今、後戻り出来ないことを強制しないから」

水島「うん」

福井「ね。貿易のディールなんて行ったり来たり出来る訳ですよ。多少、損得もあるけど、相手に全く損させるようなディールなんて、ビジネスの世界では無い訳ですから」

水島「うん」

福井「多少、本当は5/5のところを6/4ぐらいにされるのかもしれませんが、それも全然、問題なしです。軍事も同じ」

水島「うん」

福井「もう日本を、そんなに虐めていいことも無い訳ですから」

大井「うん」

水島「うん」

福井「ただ乗りさせることもないですけど、とにかく、この価値観を押し付けて来ないだろうっていうのはいいと思いますよ」

水島「うん」

福井「もう、これは、よかった」

大井「うん」

水島「うん、どうですか、そうすると今の組閣、未だ全部、終わっている訳じゃないけども、こういう流れの中で、今、おっしゃるようにトランプが個人的に、今迄の支配層も本当にちゃんと居るしね」

福井「ええ」

水島「反対派も沢山、居る訳ですよ。半分近くね」

福井「ええ」

水島「っていうことになると、そんな簡単に動くものじゃないっていうことは、おっしゃる通りで、その収まる場所に収まるってというのはどの辺りに収まるってことで、どんな感じでイメージしていますか」

福井「いや、だからドルは基軸通貨のままでしょうし（笑）」

大井「うん」

水島「うん」

福井「まあ、アメリカの時代が続くんでしょう。ただ藤さんがデモグラフィーの話をされましたけど、１００年前っていうか５０年前とも違うんですが、今、白人がマイノリティになるっておっしゃいましたよね。今、生まれている子供のレベルがそんな訳ですけども、そうするとね、アメリカの将来は明るくない訳ですよ」

水島「うん」

福井「だから日本では、あまり議論しませんけども、２０２２年のPISA（国際学力調査）のテストの成績を見ると、これね、アメリカの白人の平均点５００点」

水島「うん」

福井「ね。まあ、偏差値５０っていうことですよ。大体、白人が真ん中になるような試験を作ったんですよね。日本は５４０点。アメリカの黒人はもの凄く低いんですけど、ヒスパニックは４５０点ぐらいな訳」

水島「４５０点ぐらい、ああ」

福井「そうすると、残念ながらアメリカの平均的な知的レベルも段々落ちていく訳ですよ」

水島「うん、そうですね」

福井「日本の将来は明るいんですよ。少数精鋭になっていくだけで。移民さえ入れなければ」

水島「うん。そこなんですよ」

福井「そこ。トランプさんは日本に移民を入れろというタイプの人でもないから」

大井「言わない」

福井「だから、これが大きいんじゃないですか」

水島「その移民の問題は、やっぱり国の根幹に関わって、だからトランプもね、もう、これ以上、入れないと」

福井「ええ」

水島「アメリカに移民をね」

福井「ええ」

水島「これ、やっているじゃないですか」

福井「ええ」

水島「うん。選挙の時も中心的な話でもあった訳でしょ」

福井「でも、トランプはね、不法移民は入れないって言っているだけです」

水島「ああ、そうです、そう言っていました。はい」

福井「だから合法はいいでしょ」

水島「合法はいいって言っていますよ」

藤「移民の7割は不法移民でしょ」

福井「そう。でも合法はオッケーと言っているんですね。だからアメリカは、これから大変だと思いますよ」

藤「あとアメリカって知られていないですけど、もう高齢化率が17%なんですよ」

水島「うん」

藤「もう高齢化社会ですよ。これで移民を入れなかったら、かなり、これから高齢化が進みますよね」

福井「高齢化します。でも日本よりは十分、あとですけど」

藤「まあ、でも国連で、もう高齢化社会に入っちゃっていますからね（笑）」

福井「まあ、15%超えていますねえ」

藤「うん。でも17%超えて、多分20になる可能性も高いですから。だから、アメリカと言っても決して若くないんですよ」

水島「いや、だから、今言った様に何兆円分とかね、公務員削減とかね。こう言っているのは、多分、理屈で言うと、AIとか、そういうものによってね、所謂、事務的なホワイトカラー族をバンバンやって、他の職業にね、さっき、福井さんがおっしゃっていたようにね、そういうとろに回せるかどうかね、それでないと移民を入れないと駄目だっていう議論が必ずいっちゃう訳だよ」

藤「よく日本のAI専門家も言っていますけど、エッセンシャル・ワーカーとか本当に必要な仕事は、殆どAIって未だ役に立たないらしいですね」

水島「ああ、そうなんですか」

藤「だから移民を代替できないんですよ、AIって」。

山中「ウェイトレスとかね」

藤「はい」

山中「そういうやつは」

水島「だから、そうなんです。だからね、今、言った公務員削減っていうのは、そっちに回さないとね、それが出来る人のね、アメリカで言えば、白人系の知的レベルの高い人達がね、削減するって言っても失業させる訳にはいかないっていう状態になるじゃないですか。

そこら辺のところの問題がA I、その他でやれるかどうかということになると思うんですけども、福井さんは、ずっと昔から移民だけは駄目と」

福井「ええ」

水島「他は、それをやらなきゃ日本は希望があるってね、中々、あとう（笑）目から鱗の感じで、いつも聞いていたんですけど」

藤「段々世界のコンセンサスになって来ましたよね」

福井「そう。だから、重要なことは、こういう仕事だから賃金が安くていいっていう思い込みを捨てることです。どうして大学の先生の方がお掃除している人より賃金が高いのが当たり前なんですかっていうことでもあるんですよ」

水島「うん」

福井「ね。僕は日本に居て幸せだから、外国は何処にも行きたくないんですけど、一度は、行ってみたいのは南アフリカにオラニアって町があるんですよ」

水島「オラニア」

福井「オラニア。ここは、もうアパルトヘイト政策は駄目だったという白人の町です」

水島「ああ」

福井「ね。結局、アパルトヘイト政策では単純労働は黒人にやらせて、権利は与えないとね。それは、やっぱり駄目だったんだと」

水島「ああ」

福井「だから、どんな仕事も白人がする社会」

水島「ああ、ああ」

福井「だから、これは白人がする仕事じゃないと思われた仕事も全部、白人だけがするって町があるんですよ」

水島「なるほどね」

福井「だから日本もそれを目指していかなきゃ。だから、その為には給料のパターンを変えなきゃ」

水島「うん、そうですね」

福井「うん」

水島「やっぱり、今の給料体系と言うかねえ、給与の支払いとか、価値の見方ね、これは、やっぱり昔は肉体労働は低くてというね、あれになっていましたけど、介護の仕事とか色々なものでも見直さなきゃいけない。それから教師の仕事も、福井さんは大学の先生だけど、よくねえ、学校の先生達は雑用が多くて、本当に大変だと。うん」

福井「いや、だから教えることだけじゃなくて、今は色々なアンケートがどうかねえ」

水島「うん」

福井「どうでもいいことをね。だから文部科学省は廃止してもいいですよ」

一同「(笑)」

水島「なるほどね(笑)」

福井「教育学部、何の役にも立たない学部」

水島「うん。そうですね」

福井「ええ」

水島「私もそう思いますけどね(笑)」

山中「トランプはね、もう教育省を廃止だとね」

藤「それ、言っていますよねえ」

山中「言っているんですよ。環境省とか」

藤「それは絶対にやるでしょうね」

福井「ええ、ほんと」

山中「相当な旗、振りますよ」

藤「社会保障省とかね」

山中「はい」

藤「オバマが創ったから」

水島「そういう意味で言うと、さっき石田さんが言ったように、これからのアメリカがG7とかG6とかね、こういうような形で本当に捨てていくって、今迄、付き合っていた旧世界、新世界としてのアメリカが本当に新しい形でやって、こういうものは日本も含めてそうですよ。

日米安保なんてクソみたいなものでね、中国やロシアやあれは脅威が無いとか言っているんだけど、アメリカにとって無けりゃ必要無いんだっていうことになって来る。石田さんは、さっき、ちょっと言ってくれましたけど、改めて今の組閣も含めてどうですか」

石田「やはり、まず基本は、福井さんがおっしゃったように、トランプの外交は圧力ではなくて取引ですからね」

水島「うん」

石田「これまでの圧力だったら日本の自民党政権は、その圧力の通りに言うことを聞いて、正に、もうポチと飼い主みたいに言われていますけど、これまでは、これ迄って言うか年内は未だ飼い主が居る訳ですよ」

水島「うん」

石田「今度、飼い主が居なくなる訳ですよ。飼い主が居なくなったワンちゃんは、どうやって、ご飯を食べていくんですかっていうことと…」

藤「それはありますねえ」

石田「ねえ。あと、まあ、さっき言ったように圧力じゃなくて交渉ですから」

水島「うん」

石田「今、日本の政府の中に交渉できる人が居ないですよ。それを、これから交渉していかなくちゃならない。交渉すればトランプさんは、ひょっとしたら日本にも相当な国益を齎すかもしれないっていうのは、ある種、チャンスだと思うんです。これまでとは違うチャンスだと思うんですね。例えば、茨城の天然ガスとか宮古島のガスとか第七鉱区の石油とか、あとメタンハイドレートとか何か、ずう～っと試掘段階で商業生産に切り替えられないエネルギーが、日本列島の近海にいっぱいあるじゃないですか。

これは一応、表向きは、もう採算が合わないから、商業生産、切り替わらないとかっていう報道もあるんだけど、いや、そんな採算が合わないとかって言うんだったら、そこに払うお金がないのに、何故、ウクライナに1兆何千億円の、で、あと、アメリカの Foreign Military Sales の1兆何千億円と。イスラエルにもいくら、世界にいくらと、どんどん海外に配っているでしょ。そういうお金があるんだったら、もう日本のエネルギー全力投資で、もう開発していけば、エネルギー自給国に純国際エネルギーがつくれるはずなんだけど、つukれない訳ですよ。

だから、それは金の問題じゃなくて、裏側には恐らく圧力があつた訳ですね。その圧力の部分も今度、トランプさんだったら交渉が出来るから、例えば日本は天然ガスとか石油を掘りたいと、国益の為にこういうことをやりたいんだと。その代わりアメリカにも混ぜてあげるから一緒に共同開発しないかと、アメリカにこれだけの利益が落ちますよとかね。そういうような交渉が必要になって来るんですけど、その交渉が出来る人が今の日本の政府に居ないっていうのが一番の懸念事項で、日本は正にトランプさんとは真逆の方向に向かっているじゃないですか。

トランプさん、減税と言論の自由と国内産業の活性化ですよ。日本は増税と言論統制と国内産業を衰退させていますよね。全く真逆だから、場合によってトランプさんは日本を敵国扱いする可能性だってゼロじゃない訳ですよ」

水島「うん」

藤「なるほど（笑）」

石田「場合によっては、あり得る訳ですよ。日本という国は、ロシアも北朝鮮も敵国にしちゃっていますから、そのロシアのプーチンさんと北朝鮮の金正恩とトランプさんは話し合いをするって言っている訳だから、日本は、さっさと梯子を外されちゃって、そこを、こうやって連帯が組まれちゃって何か日本、ワンワンみたいなね、飼い主が居ないワンちゃんが、どうやってご飯を食べてくndらうみたいなのがね…」

水島「何か童話っぽくていいね（笑）」

石田「えへへへ（笑）だから本当に、この日本の国益を得る為に、何か世界の潮流に乗る為

に、方向転換をガラッとシフトしなくちゃいけないんだけど、シフト出来ないじゃないですか」

水島「今のままだとね（笑）」

石田「これまでの状況から変えたくないじゃないですか、政治家も役人も官僚もね。まあ、特にザイム真理教とかなんて、これまでの利権構造とかを変えたくない訳ですよ」

水島「（笑）」

石田「だから、どうやって変えていくのかって、今後、凄く重要な課題だと思いますよ」

山中「だから議員も役人もね、皆さん、ずうっと、それで、いい思いをしてきた人達がいっぱい居るし…」

石田「そうそう、そう」

山中「うん。自民党の議員達だってね、まあ、財務省の言う事を聞いて、それで利権が入って来るっていう構造が長く続いちゃっているから」

水島「そうですね」

石田「そうそう」

山中「急にええられたとかね、アメリカはトランプなんてやられたら困っちゃうんですよ」

石田「う～ん」

藤「それで利権だったらいいんですけど、日本の政治家も役人もハングリー精神が無くなっているんですよ」

石田「ああ」

藤「もうガツガツ感が無いから」

石田「奴ら、無いですねえ」

藤「みんな、もう秀才ばかりですよ」

石田「ああ～、きっと彼らはビジネスが出来ないでしょ」

藤「だけど１９９４年の政治改革で政治家も政党助成金で公務員になっちゃったんですよ」

石田「ああ」

藤「まあ、やばい橋を渡って、お金を稼ぐっていうリスクが無くなって、全部、口を開けていればお金が入って来るから、皆さん、そういう役人と同じになっているから…」

石田「ずっと甘い汁を吸って来た人が、いきなりねえ、何か新しい事をやれと言ったって、やれない訳ですよ」

藤「だから、そういうのは、日本の政治家の資質が大きく変わらざるを得ない時代が来ると思いますね」

石田「そうそう、そうそう」

水島「だから、今、実際にそういう時代に来ていますよね」

藤「昔の自民党とかのようにハングリー精神を持った人が政治家になると」

水島「いや、だから、前に討論でも言ったんだけど、所謂、サファリパークの飼われた動物でね、自分達は自由だと思っているけど、結局、餌を与えられていた」

石田「うん」

水島「それが、今、言われたように、その親分が勝手に自分で稼いで、自分で食っていけと言われた時、こういうワンちゃんはね、どうしようっていうね」

藤「明らかに求められる政治家の資質が変わるっていう意味ではチャンスですよ。10年ぐらいかかると思いますけど」

水島「まあ、そういう意味でね…」

石田「変われるチャンスだけど、変われるかどうか」

藤「いやいや多分、昔の平沼騏一郎じゃないけど『国際情勢とは複雑怪奇なり』って言って、今のエリートの連中は多分、匙投げますよ。いきなりディールって言われても、何がディールか判らないですから」

水島「ああ～ほんとにね」

藤「私、公務員やっているから解りますけど、ディールなんて言われても判りませんもん」

石田「いや、それが出来ないと…」

水島「ディールもね、ちゃんと相手がお互いに敬意を表し合ってね、価値を認めればいいんだけど、とにかく待っている。何をどうしたらいいでしょうかって待っているようなね」

一同「うん」

水島「命令を待っているような相手だったら言いたい事をどんどんやってね、ディールと称しながら命令しちゃうっていうことになっていくんじゃないかってね」

石田「うん」

水島「そこは一番、心配ですよ」

藤「いや、この前までポチだった人が、いきなり、おい、ディールしようって言われたって無理ですからね」

石田「まあ、野良犬になり切れないですよ、きっとね」

藤「いや、だから、これから野良犬が政権中枢に入って来るじゃないですか」

石田「うんうん、うん」

藤「入って来ざるを得なくなるんじゃないですか」

石田「入って来るといいですけど…」

水島「それでねえ、だから、一番、心配なのは、そういう連中が今、外国人に土地とか企業とかね、それから移民をどんどん入れて、この間、維新の議員が、外国人はどんどん土地と企業を買って貰いたいってね」

藤「そんなこと言ったんですか」

水島「うん。言っているんですよ。これは公式に言っていますよ。だから、こういう姿勢、だって岸田だって言っていたじゃないですか」

石田「うん」

水島「だから、こういう人達が居る訳だから、結局、私達が、もっと酷い話になると華僑とかね、アメリカのそういうエリート達が我々を支配して羊みたいな日本人を、こき使うね、だからディールの必要も無いような、現代奴隷制みたいなことになる可能性だって、本当に言いたくなるっていうかね」

石田「下手したら、次の飼い主はチャイナになっちゃうかもしれないですよ」

水島「いや、そうですよ」

石田「ね」

水島「みんな、ネットワークがしっかりしていますからね。うん」

藤「いや、まだチャイナになればいいと思うんですけど、チャイナもボロボロですから」

水島「いや、だからね…」

石田「ボロボロの飼い主になっちゃったらヤバイですね」

水島「もっと苛酷に取りますよね。それと、もっと言えば、アメリカはディールですから、じゃあ、中国だって別に共産主義だから嫌だとか言わないですよ。商売になるなら、お互いに日本を草刈り場にして徹底的に搾り取ろうぜと」

石田「そうそう、そうです」

水島「そういう可能性、凄くある訳ですよ」

石田「うん」

水島「だから今、福井さんが言っているように移民っていうのは単なるね、外国人が入って来るだけじゃないっていうね」

石田「うん」

水島「もう国柄そのものも全部、変えるっていう恐ろしい事だと思うんですけど、お待たせしました。エルドリッチさん」

エルドリッチ「はい」

水島「すみません、どうぞ。はい。先程の二番目のこれからのことですけども、はい」

エルドリッチ「はい。今迄、大変、面白い議論でしたけれども、賛同できるものもあれば、全く賛同できない話もあったんですけれども、私は二回目の発言として、冒頭で申し上げたように、トランプが何をやるかのお話したいと思います。基本的に私は、彼から3つのことが見えるかな。3つの事をするだろう。一つは国内問題」

水島「うん」

エルドリッチ「二つ目が経済政策。三つ目が対外政策。国内問題の中には、お話があったように行政改革とか、或いは、政府の効率化。これは凄く必要です。私は2回、アメリカ政府に勤めたんですけれども、あと、日本の政府、地方自治体と日本の国家公務員の経験もあります。要するに4つの政府経験があるんですけれども、とにかく効率が悪い」

水島「うん」

エルドリッチ「そして人が多過ぎる」

水島「うん」

エルドリッチ「だから恐らく連邦政府とかの職員を、もしかすると、少なくとも三分の一ぐらい減らすんじゃないかなあと思っています。うん。そこで、やっぱり、民主党と共和党の大きな哲学的な違いがあると思う。それで表れているのは、民主党は政府によって問題解決できると何か思い込んでいる。そこで、所謂、大きな政府をどんどん作っていくんですけれども、しかし、例えばヴァンス次期副大統領が彼の回顧録とか発言の中によく出ているんですけれども、政府がその答えではない。むしろ問題を起こしている」

水島「うん」

エルドリッチ「そこで国民が政府に依存してしまう」

水島「うん」

エルドリッチ「だから、そういうようなデカイ政府を、とにかく縮小していくという風に思っています。そして国内的には沢山の問題が実際に存在している。麻薬、或いは、お酒の依存症。自殺も非常に多い。だから今回の選挙で、例えば、若手の白人男性が物凄くトランプに入れていたんですけれども、やはり彼らは非常に絶望的になっている。その不満がある。

それでヴァンスは、まあ、そういうグループから来ている者です。だから彼は貧困の問題とか家庭内暴力の問題とか、低い教育の水準とか、学校のこととか物凄く内面の問題を解っているんで、私はトランプがかなりの部分を彼に任せるという風に思っています。それが無責任の任せっ放しではなく、つまりトランプは関心がないのではなくて、トランプは得意なものであるんで、それに専念する。

そして山中先生がおっしゃっていたように、次の世代を養成するという風に思います。まあ、さっきトランプ時代が32年まであるということなんですけれども、私は、もしかすると少なくとも、これから12年あるという風に思います。勿論、憲法上、トランプは、あと4年しか務めないですけれども、彼が緊張感を持って、4年を待たず2年で出来る改革をどんどんとやると言う風に思っています。

だから彼が信頼できる、やる気のある閣僚を集めている。既に、皆さんがやはり実績がある、何故、2年でやるかって言うと、政府が遅いので、そもそも一期目で彼の政策に物凄く邪魔

をした人達が、沢山居た。だから、なるべく、そういう人を排除していくことと、もう先週、彼は、どんどん色んな声明を発表して、また大統領指令になるものを今から用意している」

水島「そうですね」

エルドリッチ「だから、ある意味で、もう次の政権が始まっている。法律的には始まっていないですけども、政治的にはもう動き出している。経済の方は、トランプとアドバイザー達が中心にやると思うんですけども、3つ目の分野が対外政策だ。私は、彼が、これから4つのものを、この順番でやると思っています。

一つがウクライナ戦争の停戦とロシアとの関係修復。二つ目がガザ問題と中東の平和交渉を再開すると思っています。三つ目は、台湾の国家承認と中国との問題。四つ目が北朝鮮の問題。何故、その順番でやるかというと、もしロシアとの関係修復が出来たら、アメリカの、まあ、必要以上にヨーロッパとの、特にウクライナ戦争に関わる人が無くなる。そうすると、米軍の再編が出来る、或いは再構築が出来る。今、ガタガタしている状態です。

そしてロシアと中国との関係が切り離すことが少しできる。二つ目が中東の問題ですけども、先程、お話があったように石油のこともあるし、そして、アメリカが必要以上に中東にコミットしなくていい。そこから、また東アジアの方にシフト出来る。台湾の国家承認ですけども、当然、中国が反発するんですけども、ロシアに100%、中国は頼れなくなる。

四つ目の北朝鮮ですけども、平和条約との締結ですけども、私は、それを最後に回すと思う。何故なら、もし台湾を国家承認して中国が動き出したら、そこで北朝鮮は中国に協力、加担した場合、アメリカは永遠的に平和条約を結ばないのは北朝鮮が多分、解ると思うので、それを、ある種の条件にする。そうすると台湾国家を承認すれば、中国がそう簡単に動けなくなる。

対中政策ですけども、基本的に二つの方針をやると思っています。一つは、中国との経済関係を切り離す。所謂、デカップリング。二つ目は、中国の共産党の正当性そのものを攻撃する。要するに、共産党の存在そのものを否定する。その政策を考えて打ち出している人達が、かなりの人達が政権に入る予定ですので、彼がそういう風に展開するんじゃないかなあと、私はと思っています」

水島「うん。なるほど。エルドリッチさんね、二番目のガザの問題ですね、中東問題」

エルドリッチ「(頷く)」

水島「これは今、具体的に言うと、解決に向かうっていうんですけど、さっき、ちょっとね、音声的に乱れたので、この二番目にあげたガザ中東問題について、もう一回、具体的にお話し戴けますか」

エルドリッチ「そうですね。一期目は中東の平和プロセスがあったんですけども、それは中断されていたので、一期目が終わったから。このイスラエルのガザへの攻撃をやめさせる為に中東の各国がイスラエルを国家承認させる、そのような取引をすると思います」

水島「なるほど」

エルドリッチ「それを取引材料として、イスラエルを説得すると思います」

水島「具体的に言うと、今言った様に、今の段階ではネタニヤフ政権は、所謂、レバノンの西岸まで併合するとか、ガザ地区に色んなものを長期駐留する軍事基地も今、造ろうとしているとか発表しているんですけども、それと、もう一つはイランの問題ですよね。何処までも行くところまで行ったら、最終的には核施設まで攻撃するんじゃないかっていうようなことを言われているんですけど、ネタニヤフ政権、私がエルドリッチさんに聞いたかったのは、バイデン大統領は一時的に、これ以上、攻撃してガザで虐殺するなら軍事援助を辞めると二回ほど言ったんだけど、結局はやめないで今日まで来てしまった。

この辺はトランプ政権だと、あと2か月ですけども、どういう形で、このネタニヤフ政権を扱うのか、ついサウジアラビアで会議を開いたように、パレスチナの虐殺を阻止するっていうのはムハンマド・ビン・サルマン皇太子の声明になっているんで、中々難しいと思うんですけどね。

中東和平の仲介をアメリカ、トランプ政権がやるのは、ある意味で、どの辺が落としどころになるのかなと思うんですけども」

エルドリッチ「私は現地の人間ではないので何とも言えないんですけども、77年間、続いている問題ですので、おっしゃるように、そう簡単に解決できないけれども…」

水島「そうですねえ」

エルドリッチ「でも、このままだったら、やっぱり限界があると感じている首脳達も居るという風に、私は感じている。トランプはこの問題に非常に関心があることを象徴しているのは、先程、山中先生があげていた人物のリストがあったんですけども、そこに中東の特使のものもあったので…」

水島「ありましたね」

エルドリッチ「だから早めに取り組む、まあ、もしかしたら、既に内々で取り組んでいるんじゃないかなあと思っています。それで放っとくはしないという風に思います」

水島「なるほどね。石田さんね、さっきもサウジアラビアの会議の話をしたけども、これ、本当に、今、エルドリッチさんが言った様に、もう80年近くも、ずっとやっているじゃないですか」

石田「うん」

水島「解決つかないですね。ところが、例えば、イランとサウジアラビアとかね、色んな中で中東では色んな繋がりが出来て来ている」

石田「うん」

水島「この間の紅海でイランとサウジアラビアとねえ…」

藤「ああ、軍事演習、やりましたね」

水島「ねえ、共同で軍事訓練を」

藤「そうそう、それ、ちょっとCMのあとに詳しく説明していいですか。色々意見がありますので」

水島「はい。分かりました。という様なことでね、こういうことがあるんですけれどね、今、本当に難しいとは思うんだけど、トランプ政権にとって、もう一つ言うと、ユダヤ人のね、世界の中で一種の指導的というかね、支配階級の中心になっているっていうことを考えると、イスラエルはユダヤの国ですから、この辺のところ本当に難しいと思うんですけどね」

石田「うん」

水島「石田さんのイメージはどうですか」

石田「おっしゃる通りで根本的な解決にはならないですねえ、もう本当にずっと続いている問題なので根本的な解決にはならないけど、まずは戦闘を止めるという視点で考えると、止めることは出来る可能性があるなと思うんですよ」

水島「うん」

石田「エルドリッチさんもおっしゃっていましたが、僕はサウジアラビアが一つのキーマンだと思っていて、要はサウジがイスラエルを国家承認するっていうのは大きな材料ですね。で、トランプさんは2020年8月にアブラハム合意と言って、アラブ諸国とイスラエルを握手させて国家承認させましたが、その次に来るのがサウジアラビアっていうところで、それが実現しないままバイデン政権に移っていったんですよ」

水島「うん、そうでしたね」

石田「サウジアラビアからしてみれば、イスラエルの投資資金とテクノロジーは喉から手が出る程、欲しい。サウジアラビアは脱石油を目指していて、今、国家のプロジェクトとか、あちこちで沢山、つくっているんですけど。そういうところも、あと農業プロジェクトに関してもイスラエルのテクノロジーと投資マネーが欲しい訳ですよ」

水島「うん」

石田「イスラエルからしてみれば、やはりサウジアラビアって言ったらアラブの盟主なので、まあ、サウジに国家承認をして貰うということで孤立から大分、緩和されるっていう状況で、イスラエルからしてもサウジに国家承認して貰いたいっていう思いはあるんですね」

水島「うん」

石田「ただ、やっぱり去年の10月7日にガザ戦争が始まっちゃったので、結構、握手する直前までいったところで一気に破談になったっていう感じで、それをトランプさんは引き戻そうとするんじゃないでしょうかね」

水島「なるほどね」

石田「アメリカのトランプ政権にとって、さっきも言ったけど恐らくトランプさんが大統領就任した一か国目の外遊先はサウジになると思うんですよ」

水島「うん」

石田「ムハンマド・ビン・サルマンと恐らく既にそれに近い話は多分、電話で話しているんじゃないかなって思います」

水島「うん。なるほどね。それはあり得ますもんね」

石田「そう。10月7日以前にはネタニヤフ首相もサウジのムハンマドに電話して、イランを攻撃したいと。だから手伝ってくれっていう電話までかけているぐらいで、結構、国交正常化の直前まで行っていたんですね。それぞれ首脳同士が電話でやりとりしているって思っていたんだけど、その先のイランとサウジの国交正常化という何か別のところで、おいおい、おいって言って、イスラエルからしてみれば、梯子をどこかあ〜んっと外されちゃった感じだから、そこが、ねえ、さっきも水島さんがおっしゃっていましたが、合同軍事演習なんかもイラン・サウジでやっているの、一筋縄ではいかない複雑な状況があるんだけど、いずれにせよ、サウジはキーマンだと思いますね」

水島「うん。なるほどね」

石田「今回の戦争を止める為に、何らかの形でサウジが条約とかに参加して来る可能性っていうのはあると思います」

水島「それとね、もう一つ、ここで一回、CMを入れますけど、本当にイスラエルの、所謂、ハマスが千人規模で領内に入ってね、みんな、射殺されたんだけど、こういうことが全く知らなかったってイスラエルは、ずっと言っているんだけどね」

石田「うん」

水島「逆にやらせていたんじゃないかっていうね」

石田「いや、それは…」

水島「ということになると…」

石田「知らない訳がないですよ」

水島「だからイスラエルは平和を本当に求めていると」

石田「求めているです」

水島「だから、みんな、我々のイメージは、人類は、みんな、平和を求めていると思っているけど、実は戦争があった方がいいと思っている人達が居るのは、ウクライナを見ていると明確な訳ですよ」

石田「うん」

水島「戦争を継続した方がいいっていうね」

石田「うん」

水島「いくら人が死んでも構わないという人達も居ることを踏まえると、今、言ったサウジというのは大きい存在って言うかね、このサウジアラビアが、どういう形で、自分達、中東、それからイランだって大きい国ですから、ペルシャですけどもね、アラブではないけども、やっぱり、そういうところの問題、それから我々の国が、九十何パーセント、中東に石油を依存している。この辺、どうしたらいいかっていう、これも、これからの日本のエネルギー政策の問題にも関わるのでね」

石田「そうですね」

水島「一回、CM、入れたあと、あと1時間弱ぐらいですけど、また、前へ進んでみたいと

思います」

藤「ちょっと発言していいですか。本当に」

水島「一回、お休みします」

大井「はい」

<後半>

水島「後半になりました。後半の終わりのところで、石田さんに中東のサウジアラビアの重要性、そしてトランプがどういう政策を執るか、中東政策、そして、もう一つ言うと、我々の国のエネルギーの95%を中東に頼っているという状況を踏まえて、我々の国がどうすべきかと、これも含めて、じゃあ、藤さん、お願いします」

藤「ああ、すみません。実は中東情勢について、私は割合、楽観視してしまして…」

水島「おお」

藤「多分、1月20日にトランプさんはネタニヤフに対して、とにかく、その間は何をやってもいいから20日までに戦争をやめろと言っていると思うんですよ」

水島「なるほど。ああ、そういう考えね、面白いね、うん」

藤「彼にとって戦争はコストですから、軍事支援なんかしたくないと」

水島「うん。したくないですね」

藤「とにかく今のバイデンのやっている軍事予算でもなんでもいいから、それで、とにかく、ヨルダン川の西岸から全部、取っちゃえと」

水島「なるほど（笑）」

藤「そこから先はやめろという前提でやっていると思います」

水島「じゃあ、20日までにやれるところまでやって、それまででやめろと」

藤「実際、彼はそういう風に言っていますからね」

水島「うん」

藤「20日までに戦争をやめろと」

水島「なるほど」

藤「だから彼にとって戦争はコストですから」

水島「うん」

藤「だから、とにかく戦争はさせないと。もうやめろと」

水島「本当は評判が凄く良くなりますからね」

藤「はい。その時に僕は…」

水島「さすがにね…」

藤「今、日本ではあまり注目されていないんですけど、サウジのムハンマドさんが確か11日の、アラブ、イスラム機構会議の場でパレスチナは虐殺だっているところについてスポットが集まっているんですが、実は、もう一つ重要な発言をしているんですよ」

水島「うん」

藤「彼はイスラエルのイランに対する攻撃自身も、イランの自益を損害するからやめろと言っているんですよ」

水島「うん」

藤「これは、やっぱり驚くべき発言で…」

水島「うん」

藤「先程、水島社長がおっしゃったように、先週とか先々週、オマーン湾ですかね、ホルムズ海峡の外の海で軍事演習やっているんです」

水島「うん、うん」

藤「確か11月11日か10日か忘れちゃったけど、サウジの参謀総長がイランに行ってイランの参謀総長と会っているんですよ。来年、正式に軍事演習をやりましょうっていう話になっていて、相当、サウジとイランの間で融和ムードが出来ている。そういう意味では、例えばイランによるホルムズ海峡の封鎖っていうシナリオは相当、減りました」

水島「うん」

藤「一方で、もう一つ注目すべきは、アメリカのスカイニュースが報じていますけど、どうもトランプさんはイラク経由でイランに相当、強烈なメッセージを出したようです。それで、イランがイスラエルに対する報復をやめたという報道が出ています」

水島「まあ、全体的におとなしいですね」

藤「(頷く) あと、これも、あまり日本で報道されていませんけど、前回のイスラエルの空爆でイランのエネルギー施設と核施設の防空施設は全部、やられちゃっているんですよ」

水島「うん。う〜ん」

藤「実は丸裸なんです」

水島「うん」

藤「次は、もう本当に潰せるんです。だから、それも含めて、今度、やったら知らないからなと言ってやめたし」

水島「うん」

藤「一方で、例えば、サウジとは本来なら蜜月関係ですから、トランプさんがなる直前に、どうしてイランと手打ちをするんだと。多分、これも、あまり報道されていませんけど、ムハンマドさんって実質的な権力者ですけど、未だ国王じゃないんですよ」

水島「うん」

藤「未だサルマンさんなんですよ。このサルマンさんも最近、物凄く健康状態が悪くなっていて、実はXデーが近づいています」

水島「なるほど」

藤「やっぱり未だサルマンさんの世代を含めて、サウジでは、二つの首都の守護者として、やっぱり譲れない線があって、私は正直言ってサウジとイスラエルの国交正常化は無いと思います」

水島「うん」

藤「その代わりにトランプさんは20日迄、好きなことをやれと。その代わりに20日になったら、ちゃんとやめろよなっていう言い方をしているので、多分、そういう形で終わっていくんじゃないかと。まあ、分かりませんよ。多分、アメリカはそう考えて、多分、コロッて、必ず相手が居る話ですから、何かの形で、例えば、混乱が生じて、また酷いことになるかもしれないんですけど、でも、そういう方向に行くだろうと。

これは一点目と二つ目、日本のエネルギー安全保障とか原油の中東依存度を下げるカードは、前から言っている様に、アメリカの原油を買えばいいんですよ」

水島「と言うか、高くても買わなきゃいけないね」

藤「はい。アメリカの原油って生産量が今、1350万バレルっていうことで、サウジよりも450万、いっぱい出しているんですね。もっと驚くべきなのは、1日あたりの輸出量は400万バレルを超えていまして、日本の1日の消費量が大体270ですから、例えば130万を輸入することも、実は可能な訳ですね。ただ、何故、日本の石油会社を買わないかって言うと、アメリカは油が軽いから、日本の製油所は中東産の質の悪い油を貯蔵する施設になっていますから、そうになっているってことと、やっぱり中東に比べて遠いですから、船賃がかかるんです」

水島「うん」

藤「実は、アメリカのシェールオイルをアジアで一番、買っているのは韓国でして、韓国は、実は政府が船賃を補助しているんです」

水島「うん」

藤「私は、正直言ってトランプさんとのディールは、これからアメリカの原油の半分ぐらいを高値で買いますと」

水島「うん」

藤「その為に、しっかりと船賃も出して、日本の石油会社にもスペック変更させますと言えば、多分、ディールは成立するし、多分、中東依存度が50%以下になります」

水島「うん」

藤「これも政治の意志の問題です。ただ、前から言っている様に、残念ながら、私の親元の経産省も含めて、今の現役の人達は再生可能エネルギーしか関心ありませんし、原油は終わったコンテンツ、オワコンですから、それに金を出すっていうことは、さらさら意識が無いんですけど、もしトランプさん、選挙期間中に原油含めてドゥルー、ドゥルー、ドゥルーって言っていますから生産すると。生産量が増えたら、その分、日本が買うって言えば、結構、出来るし…」

水島「そういう意味じゃあ、だけど、今…」

藤「多分、そうすれば…」

水島「その話、聞いていると」

藤「はい？」

水島「何か日本は扱い易い国だね（苦笑）」

大井「（笑）」

水島「せっぱつまって…」

藤「いや、だから…」

水島「なんでも高い金を出しそうだし」

藤「扱い易い国だから、それで、ある程度、満足して貰えば、若干、その防衛費の増額があるかもしれませんが、あとはトランプさんが関心の一つに置かれて、また、日本だけは、うつつを抜かすような世の中になるかもしれませんがね」

水島「うん。だから…」

藤「だから、そういう切り札がありますから、それさえやれば、トランプさんは、もうオッケーだと思いますけどね」

水島「う～ん、いや…」

藤「まあ、ちょっと楽観的過ぎるかもしれませんが」

水島「まあ、そういう意味で言うと、色んな意味で日本が使われそうな感じがね、今のエネルギーの問題もそうだし、食糧の問題もね、結局、馬鹿はいいように扱われるっていうね」

藤「まあ、でも原油と穀物、買うぐらいで済めばいいんじゃないですか」

水島「うん。まあ、という考え方もあると思うんですけどね」

藤「あと、それから、もう一つ言いますけど、サウジは、正直言って、もうアメリカの為のステイトホルダーじゃないんですよね」

水島「うん」

藤「というのは、アメリカは今、サウジの原油を殆ど入れていません」

水島「うん」

藤「サウジの重い原油の代わりにカナダから今、原油を入れていますから。トランプさんは、カナダからの原油だけには関税をかけないって言っていますから」

水島「うん」

藤「もう完全にカナダが、完璧に中東の代替地になっていますから、私は、正直、言ってサウジは2016年に、確かに石田さんがおっしゃったように、サウジに行って武器を買わせましたけど、私は多分、サウジに行くっていうトランプさんのインセンティブは、殆ど無いんじゃないかなあとは思っています」

石田「何処に行かれると思いますか」

藤「逆に私は何処も行かないんじゃないかと」

大井「(笑)」

藤「来るなら会ってやると。だから、例えば、この間、ワシントンにトランプさんが来た時に、下院議長がトランプのことをこう紹介しましたね」

水島「うん」

藤「Our King. 我々の王様って言いました。元々アメリカの大統領っていうのは、ご覧の通りイギリスの国王をモデルにして作ったと言われていますよね」

水島「うん」

藤「国王になりました。君臨すれども統治せず。来るなら会ってやる。態々行ってセールスマンになるっていう態度は、もしかしたらトランプさんは、もう執らないんじゃないかなって勝手に思っています」

水島「うん。そういう流れの中で出て来るのは、ブリックス、或いは、グローバルサウス、この人達が別の中国や、特にロシアですね。こういう形で別の価値観を持った世界を創ろうとしている。これは、やっぱり流れが一つ出来ているっていうね…」

藤「ただブリックス含めて国際組織については多分、トランプさんは全然、重きを置いていないと思いますよ」

水島「ん？」

藤「重きを置いていないと思いますよ」

水島「ああ～」

藤「だって政治的な決定権が無いですから」

水島「今はね」

藤「でもブリックスなんて、ずっと烏合の衆で、この間もやりましたけど何にも決まっていませんよね」

水島「うん」

藤「何か新しい取り組みをする訳でもないし、まあ、ブリックスの名付け親の元ウォール街の人が言っていますけど、本当に今、否定的ですね」

水島「う〜ん」

藤「ただ記念写真を撮っているだけじゃないかと」

水島「まあ、まあ、ちょっと、まあ、それは色々意見があると思うんでね、敢えて否定はしませんけど…」

藤「はい」

水島「私から言うと、その時代の流れの中でアメリカが力を失っていくとかドルの問題とか色んな問題が起きているのは、そういう流れの中で生まれた流れだから、ブリックスとかグローバルサウスの流れっていうのは、そこが、もう少し、あのう…」

藤「でも関税、かけたら、ブリックスも全員、絶対に反対しますよね」

水島「ん？」

藤「インドも反対しますよね」

水島「勿論、だから、そうなると、余計に離れる状態になってくるっていうね、別のお金とか、そういうものが必要になって来るとかね、そういうことになる可能性があるんで、まあ、これは、またブリックスをやったら、また1時間、2時間、かかるんで…」

藤「殆ど個人的な私の意見ですから。はい」

水島「まあ、というようなことですけれども、もう後半なので、じゃあ、日本はどうするんだっていうと、さっきから色々出ちゃっているから辛いところですけど（失笑）、聞き難いけれども、山中さんは、どうですか」

山中「今の藤さんのお話もお聞きして、グローバルサウスをどう見るかとか、まあ、これは、確かに、これだけで相当な時間を要しても、直ぐ終わる話じゃないんですけど、まあねえ、やっぱり大きく流れは変わって来ていて、アメリカの一極覇権という時代もずう〜っと続いてきたのが、やはり、これは明らかに中国との多極化っていう方向へ、どんどん走り出して、それは大きなトレンドがあると思っているんですね。

そして、それにロシアっていう、経済規模は米中に比べればロシアは小さい、ね、だから軍事ということを考えれば、この三極が、やはり世界で圧倒的な核保有国であるし、だから、こういう、いくつかの多極化の方へどんどん動いている中に於いて、そういうコンテクストで考えた時に、やっぱりブリックスと、そのあとに続くグローバルサウスということになると思うんですね」

水島「あと、インドですね」

山中「うん、あとインド。やっぱりインドですよ。だから、こういった核大国であり人口大国であり、経済大国であり、軍で言ったら、やはり未だ米軍、アメリカの力は確かに大きな軍事費を持っているのはあるにしても、ただねえ、僕は、やっぱり大きな流れだけは今後、益々進むことになると思っていて、やはり通貨が未だ決まっていませんよね。去年、出るって言ったのが出なくて、今年も未だ形になってはいない。

だけど、やはり、この金をベースにした一つのデジタルを使った、まあ、そういった通貨を、彼らは、ずっと準備をしているし、ただ、それが直ぐにドルに置き換わってね、直ぐにいったらという話ではないけれども…」

水島「そうですね」

山中「間違いなくドルの基軸、世界の基軸通貨であるドルの取引量がね、ぐう〜っと落ちて来ているんですね。特にウクライナ・ロシア戦争が始まってから一気に加速した。しかし、これは別に何もロシアがやりたくてやった訳じゃなくて、アメリカが外しちゃったからね、あのSWIFTっていう国際銀行システムをね、だから仕方なくって言ったらあれだけロシアの方が、どんどん取引量を…」

水島「自立的に使っていているというねえ。うん」

山中「ええ。そうなんです。だから、そういうことでルーブル。だけど、それが結果的に、もっと中国ロシアを近づけることになってしまって、それが、彼らは二つの国だけじゃなくて一緒にインドも入って、そういう一緒に、またグローバルサウスなんていうのになると、今は未だ20〜30か国っていう話だけど、そこに入って来たいっていう国はアフリカやアジア中心に、もっとあるとなると、やはり、今迄のG7を中心とした日本も名誉白人みたいに入れて貰って喜んじゃっているけれども、いつまでも、その中に居るだけのあれでは、やはり大きな世界の流れがどっちに向かっているかっていうことを、やはり日本の政治家は考えなきゃいけないですし、これが、ただ一般のテレビを観てね、新聞を読んでいりゃあ、世の中が分かると思っている人達だったら、それはそれでいいけども、まるで、そこでは報道が無い世界があって、石田さんなんか正にそういうことを沢山、本で書いていらっしゃるから、沢山、売れて講演会も忙しいと思うんだけども、本当にね、やはり、そこをしっかりと考えてやっていかないと、何故、僕が、これを言っているかと言いますと、アメリカで、私が、ある程度、信頼している保守系の元軍の方とか元CIAの分析官だとか、そういった世界に居る人達のあれがあって、ずうっと聞いていますとね、彼らが全くそっち側の考え方なんですね。非常に保守なんだけれども、所謂、このバイデン政権なんかが進めて来た、あの様々な中東政策であり、ロシア/ウクライナの一方向的にウクライナが善くて、プーチン、悪魔だ、ヒトラーだと、これには、まるで彼らは観見していないっていう人達が結構、居ましてね。

そういう人達がバランス感覚で見た世界の大きな動きっていうのは、明らかに今言った様な、そちらの方向へ、だから経済でも通貨でも逆に何が起きているかっていうと、ヨーロッパの特に盟主であるドイツとか、こういうところの経済が今、各国、ガタガタに来ちゃっている」

水島「うん、なっていますもんね」

山中「ええ。だから経済がやられている。インフレが凄い。もう最大の理由は、ロシアからの安い天然ガスが入らなくなった」

藤「ああ、自業自得ですよ」

山中「ええ。自業自得。正にその通りでね、そしてアメリカの方からのこれも分かっちゃっているけど、CIAが例の北海のパイプライン、ノルドストリームを爆破したっていうことさえ、やられた側の最大の被害国のドイツがそれを表立って言えない」

藤「言えないですねえ、言えないですねえ」

山中「ええ。こういうことが、もう起きていますよね」

藤「はい」

山中「だけど、いつまでも、その状態が続くのか、しかしアメリカのバイデン政権が非常に国務省がね、僕は今でも思っていますけども、非常に偏ったアメリカ国務省の、反対に言えば、もうロシアに対して反と言うか憎悪をむき出しの政策というものを反対側のウクライナは、あれだけ巨額のね…」

藤「そうですね」

山中「ええ。資金が25兆円ぐらいでしょ、日本円にして、とんでもない金額をね、日本も2兆円ぐらい出しているけども、圧倒的にアメリカの救済策が無ければ全然、戦争も立ち行かないあの国を、間違いなく、さっきも触れましたけど、トランプが、要は金と武器を送らなきゃウクライナは今、はっきり言えば生命維持装置を付けている状態ですから、これがね、いつ終わるかって、一か月、二か月かは、分かりません。ただ、それは終わると思うし、彼は両方に、プーチンとゼレンスキーに間違いなく電話をして、この条件、飲めない条件じゃなくてね、両方が、ある程度、どっちかが勝つて絶対に無いと思いますよ。どっちかが負けるってディールでも無いんですね。必ず、ある程度、相手側も取れる、相手側も譲歩する、これをお互いに落としどころをやるのがディールな訳で、トランプは、ある意味、天才的な人間ですから、これを仕切るんじゃないかなという風に、私は考えているんですが、大きなコンテキストの中で言えば、今、言った様な、そういう流れがあって、その中で今後、トランプ政権は割とリアリティを持った現実的なことをやっていくんじゃないかなって気はしているんですね」

藤「だからウクライナのゼレンスキーが地顔を表していて、軍事支援やめたら核兵器を造るって言い出していますよね」

山中「ああ、言っていますね」

藤「ああ、アメリカが軍事支援をやめたら、核兵器を造り出すって言い出していますよね」

山中「核兵器を」

一同「(苦笑)」

水島「元々は持っていた国だって言っているんだけど、ただ、おっしゃるように、本当に、1月の大統領の就任直後の一か月ぐらいにバタバタとね、軍事的に言うと、この間、軍事討論をやった時も、圧倒的にロシア軍が5万人も用意してね、クルクス州から追い出そうとしている」

藤「そうですね」

水島「挟み撃ちにしようとしている」

藤「うん」

水島「全然、報道されていないけども、圧倒的にやられていると」

藤「そりゃ、そうですね」

水島「必死になって守っているけども、ロシア軍がどんどん進んでいるっていうね。だから、やればやる程、人は死ぬし、土地も奪われて行く。それからブラックロックで殆ど地下資源の権利は全部、ブラックロックがウクライナを取っちゃったと。6割の畑も穀倉地帯もね、ブラックロックが押さえているとかね。こういう報道されているのを見ると、もう取る所が無いんですよ。全部、武器で金を儲けて、エネルギーで金を儲けて、そのあと、そういう食糧資源も全部、押さえちゃった。地下資源も抑えた。

もうカスみたいなものだから、あとは日本に任せて金を出させると。愚かな人が居ますから。というような状態で、おっしゃるように本当に両方共、解決をつけちゃうんですね。落としてどころっていうか、さっき言った1月20日の問題ですか」

山中「ええ」

水島「うん。そういう…」

山中「日本には『時の氏神』っていう良い言葉がありますね。だから、やっぱり全てはタイミングですよ。だからバイデンではあり得ないしカマラ・ハリスになっていたら、それもあり得ない。だけど、このトランプのタイミングで、トランプは時の氏神になれる能力もあるし、つまりタイミングは本当にそこで終わるタイミングかどうかですよ」

水島「いや、だから…」

山中「これが一番だと思いますね」

水島「まあ、みんな、ヨーロッパだって、みんな、嫌気がさしているでしょ」

山中「ええ」

水島「ヨーロッパも嫌気さしているし」

山中「はい」

水島「大統領祝賀ね、お祝い相場じゃないけども両方とも止まれば、それは、っていうねえ、おっしゃるようにトランプが『時の氏神』になろうとしているんじゃないかっていうねえ」

山中「(頷く)」

水島「そういう感じもしますけれども、それと、もう一つ、最後に、あまり時間も無くなっているので聞いておきたいんですけど、日米関係、日本の場合は、今迄のように、この間、さっきも言ったけど『日米関係の更なる進化』ね。日米安保、日米同盟の更なる進化っていうことを、石破さんは、こんなことを、ついこの間、言っている訳ですよ。5分で電話を切られたっていう噂があるんだけど…」

一同「(失笑)」

水島「この感覚で、ずうっとアメリカにくっついていたら、それで、いいのかしらって、中々難しい問題で、これも戦後80年の問題だからあれだけど、一言で言うと、どういう形だと思いますか。山中さんから、そして皆さんにも聞きたいと思うんだけど」

山中「ええ。はい。私は、はっきり言うと、あまりいい見通しを持っていないですね」

水島「うんうん」

山中「だからトランプになったから上手くいくとか、トランプになって日本にも良いことが起きるとか、確かに中国に関しては高い関税をするでしょう。これを間違いなくやる。日本に対しても強気で来るけど、ただ、それだけで済むのかなあ。つまり日本側への要求が今迄のような、いつも、いつも、はい～っていう、この、何て言うの、宗主国様、何でも言うことを聞きます、差し出しますみたいなことを続けているような政権、政治家達がやっている限り、トランプから相手にされないんじゃないかと」

水島「そうだね」

山中「うん」

水島「だから、ふんだくれるだけ、ふんだくるみたいなね」

山中「ええ」

藤「だから無視ですね」

山中「うん。無視。で、まあ…」

水島「無視ならいいんだけどね」

山中「それ以上に何かね、とにかく日本っていうのをバカにされちゃってね、まあ…」

水島「うん」

藤「5分で切ったっていうのが象徴的ですよ」

山中「ええ。5分でね」

水島「まあ、そういうとこですね」

山中「普通、プロトコールから見れば、あり得ないでしょう」

水島「はい」

山中「そういう意味で、私は非常に暗い見通しを持っているんですが、つい、この間の総選挙でも、やはり日本人の民意は自民党にだけはやらしちゃ駄目だと」

水島「そう。あれは不信任をちゃんと出しましたよね」

山中「ええ。あれは本当に、ある意味、日本で最初の何十年ぶりの不信任を出し、且つ、だからと言って立憲が全然、両方が増えた訳じゃない。いくつか増えた国民民主が代表的ですけど、やはり現状を言ったら小政党ですよ。まあ、日本保守党、参政党、こういうところが、みんな、減税、減税ですから。それを言ったところが伸びて、それ以外のところは、僕は、この傾向はね、やっぱり、れいわなんか除いて大きな世界の潮流は、これもヨーロッパなんかもそうだし、メディアから言わせると、かなり『極右』と言われる、そこが、どんどん、今、ある意味、着実に伸ばしているし、第一党、第二党になるのは未だ少ないけれども、第三党、第四党とかね、そういうところになってくる政党が日本でも割りと表れて来て、或いは、連携だとか自民と割れるのか、よく分かりませんが、そういうところでの地殻変動のようなものが今年、選挙で始まったと思っているんですよ。ええ、そういうこと…」

水島「まあ、次の参議院選挙で、また色んなあれが出て来ると思いますけど」

山中「ええ、ええ」

水島「簡単に言うと、本当に立憲が減税を言ったらね（笑）」

藤「いやあ、政権交代だった可能性がありますよ」

水島「完全にいていた訳ですよ。だから野田と石破が全く同じ考えだからね。ということですけど、まあ、それを言うと、時間が無くなるので、この辺で有難うございます。大井さん、これからの日本ということをお願いします」

大井「そうですね。これからの問題、国際秩序の問題ですけど、やはりバイデン政権の時に、あまりにも酷かったので、さっき山中さんが指摘された通り、でも、私は脱ドル化じゃなくて、実際にS W I F Tの決済通貨の比率ですね、使用されている通貨の比率の推移を見ると、脱ドル化じゃなくて脱ユーロ化ですよ」

水島「ああ、なるほどね」

大井「バイデン政権の中で、日本とドイツが蹴落とされて…」

水島「いや、本当にそうですね」

大井「要するにアメリカが一人勝ちするという、その強さを持ってトランプというカリスマの大統領をもって、ロシアとディールするっていうのがやり方で、さっきのイスラエルもですね、ネタニヤフは国際司法裁判所からジェノサイドで訴えられているから、もう牢屋に入っているで終わりだと思います（笑）」

水島「なるほど」

大井「とにかく日本とドイツ、だから新たな戦後の始まりですね」

水島「うん」

大井「ということで80年代の戦後が終わって、又、次の戦後で、我々日本はどうなるかっていうことですけど、攻撃的リアリズムって、あのミヤシャイマー博士の言うところから見ると、日本がそのリアリズムについていけない」

水島「うん」

大井「トランプトランプって、我々も言っていますが、別にトランプを礼賛している訳じゃなくて、トランプは今、国際資本、要するに、さっき出て来たブラックストーンとか、ああいう国際金融資本とディールしている訳ですよ。日本は、そのディールの弾で、お前、ちょっと、あっち行って払ってこい、こっちへ行って払ってこい。財布になっているだけで、日銀もFRBに牛耳られていて全て国際金融資本、所謂、グローバリストの金融資本の中に組み込まれていて、トランプはそことディールをして何か秩序を、もう一回、回復しなければいけないっていう、そういう凄い戦いのチェスゲームになって、それをリアリズムで戦争でするのか金で払うのか、利権を動かすかっていうチェスボードのゲームになっている訳ですよ。

今、日本とドイツが相対的に沈んで行ったと。今度、中国を囲い込んでロシアと北朝鮮と、こう並んど。並んどというか一緒にくっつけて…」

水島「そうですね」

大井「とにかく朝鮮戦争を終わらせると」

水島「うん」

大井「朝鮮戦争を終わらせるというのが第2次大戦の最終的な結論で、トランプ政権の中で、それをトランプがやると。そうすると日本の存在価値、55年体制以降、アメリカ軍が日本に軍を置いて来た正当性が全く無くなるんですね」

水島「はい、全く無いんですよ」

大井「ということは自民党も正当性が無くなる。だから次の正当性を、我々は、どうやって生きていくんだっていう国体の核みたいなものを日本人が、もう一度、言説化して、ちゃんと、こうやって存在意義と正当性と国家としての主権をこうやって守っていくライフラインの確保とか、国民の生命財産をどう守るんだって、何か一から国造りしていかないと…」

水島「うん」

大井「ちょっとねえ、間に合わないんじゃないかと思いますね（失笑）」

水島「そうですね。全くその通りですね。ミヤシャイマーが丁度、一昨日ぐらいにレコードチャイナのインタビューでしたか、彼は自分が封じ込め政策を、ずっと言って来たけど…」

大井「そうそう」

水島「間違っていたって言ってね」

大井「あ、そうですか（苦笑）」

水島「ええ～ってね（笑）」

藤「それ、中国に対する封じ込めが間違っていたって言っているんですか」

水島「そうそう。これには驚いたんですよ」

藤「うん」

水島「中国メディアのインタビューに答える中で、今迄、ずうっと、そういう風にやってきたけど、封じ込めを、もう中国は出来ないと」

藤「うん、うん」

水島「経済的にも政治的にもね。というようなことをミヤシャイマーが言ったんでね」

藤「ああ、なるほどねえ」

水島「私なんか結構、頼っていたところあったんでね」

藤「うんうん、うん」

水島「ちょっと驚いたんですけど」

大井「でも中国は今の不動産バブルの崩壊もそうですけど、今のままいくと、要するに困い

込んで、もう囲い込みは終わったんだけど、その中で内爆していくと。要するに explosion で外にドバッと広がるんじゃなくて、implosion で内側に爆破して…」

水島「ああ、なるほどね」

大井「その沈んでいく経済とかね、そういう形になると」

水島「うん」

大井「そういう予想があって、その中で、さっきエルドリッチさんもおっしゃったような、共産党、その中共の正当性を、その中にも勿論、民主主義国家としてやり直したいっていう人達も、勢力も居る訳ですから、そういう新しい国造りって言うんですかね、体制作りとか色んな事が多分、これから始まりますよ」

水島「だから、その傾向は出始めていますよね。ただ日本だけは、あまり無いというね」

大井「いや、石破さんの頭の中は、未だ米ソ冷戦時代の話位で止まっていますから（苦笑）」
一同「（笑）」

水島「本当にねえ、いや、ただ、さっき山中さんが言ってくれたように、少なくとも国民は、石破は嘘つきだ、嫌だって…」

大井「（笑）」

水島「どういふのか顔が嫌いとか性格が嫌いとか色々あるけど、拒否しましたよね。でも、国民の力を示したにも拘らず、実際、国会へ行ったら、又、ズルズルやっているっていうのが現実ですから」

大井「やっている。うん」

水島「その辺は見なきゃいけないと思うけど。冒頭、言って貰ったけど、これからのことで」

藤「ああ」

水島「是非、はい」

藤「多分、あれですよ、さっき大井さんが脱ユーロ通貨って言われていましたけど、ユーロですら、もう駄目ですよ」

水島「うんうん、うん」

藤「ユーロ枠、まあ、我々もECBをつくって共通の金融政策をつくりました」

水島「うん」

藤「ただ財政政策、共通していませんから、ポンコツ通貨です」

水島「うん、そうですね」

藤「だから実質、流通したのは1997年ぐらいからですか。まあ、3年弱ぐらいもったんですけど、それ考えたらブリックス共通通貨なんか絶対に出来ないですよ」

水島「なるほど、まあ、そういう意味でね」

藤「はい。だから、そういう全くメリットにならないものについて、私は、トランプさんとしては全く関心がないだろうというのが一点と。それから、もう一つ、やっぱり心配なのは、トランプさんって安全保障も全て関税で解決しようと思っているんですよね」

山中「それ、そういう風に言っています」

藤「本当かどうか知りませんが、この間、もし中国が台湾を侵攻したら１５０から２００の関税をかけるって言う訳ですよ」

水島「１００％以上、かけるでしょう」

藤「だから、私は正直言って、先程、大井先生が強い軍隊って言っていましたが６．５兆ドルの予算から２兆ドルも減ったら、国防総省の予算も多分、削減ですよ。だから、多分、彼が戦争はコストだと。少なくとも負けそうとか勝てる見込みが無い戦争はやらないということになったら、多分、本当に世界の警察官じゃなくなる」

大井「うん」

藤「全て関税だと」

水島「だから、この間のパターンでウクライナに武器援助をしていますしね」

藤「うん」

水島「あれだけど日本に戦わせる」

藤「うん」

水島「韓国軍とか日本の自衛隊とかね」

藤「うん」

水島「だから、こういうものにやらせるっていうね」

藤「うん」

水島「元々ベトナムの時もそういう意図もあったけども、そういう傾向、自分達は絶対に、やらないっていうね」

藤「いや、本当に、実は、ちょっと前までは中国が台湾に侵攻する可能性は低いと思っていたんですけど、最近の中国の状況を見ていると、本当に、もしかしたらやるんじゃないかと思いは始めているんですよ」

水島「うん」

藤「この間の広東省の珠海で６２歳の男性が小型ＳＵＶで、結構、人を殺しましたよね」

水島「二十何人ね」

藤「うん、だから、もう中国では社会報復性事件っていうんですか」

水島「うん」

大井「う～～ん…」

藤「例えば犯罪予備軍が億単位で居るっていう…」

大井「億単位」

藤「報道する中国メディアも出て来ていて…」

水島「ねえ、それをどんどん入れているんですからね」

藤「あらゆるところに怨嗟の元、もともと中国って地方政府が悪いと。中央政府は水戸黄門的な形で漫遊してくれたら、地方政府をやっつけてくれるっていうけど、まだ今のところ、習近平、中央政府に対する批判は無いんですけど、でも習近平に向くと思ったら、やっぱり昔からですけど、国内の不満って対外的なものに転嫁しますよね」

水島「うん、転嫁しますからねえ」

藤「だから勝てると分かっていないのに、もしかしたら本当にやるかもしれないと」

水島「はい」

藤「そうなったら、本当に社長がおっしゃったように、日本はどうなっちゃうんだろうと」

水島「うん。台湾をやる前に、尖閣を占領する可能性が非常にありますよ」

藤「いや、だから、もう少なくとも、それ…」

水島「一番、リスクが無いから」

藤「それをやって、あと、日本に対して凄く煮え湯を飲ませたと」

水島「そう」

藤「そうなった時に日本の世論がどうなるか、沸騰しますよね」

水島「許し難い暴挙って言って石破さんが声明を出して…」

藤「それだけで済みますかね（苦笑）」

水島「大体、終わっちゃうんじゃないかな」

藤「ああ、それだったらいいんですけど」

水島「いやいや、そういうのは、本当によくないですよ（苦笑）」

藤「（笑）」

水島「ただ、そういう可能性が非常にあるっていうね」

藤「ええ。それで、どんどんエスカレーションしていきますよね」

水島「はい」

藤「そうやって、とにかく国内の不満を外に逸らさなきゃいけないという状況は、中国でこの一か月で物凄く進んでいますから」

水島「いや、そのリスクは増えている」

藤「うん」

水島「だから前も言ったんだけど、もし尖閣を取るんだったら、我々は、躊躇なくNPTを撤退して核武装をするという宣言をしときゃいいっていうねえ」

藤「うん…」

水島「少なくとも言葉だけでも出来る抑止をやらなきゃいけないけど、本当に何もやっていない」

藤「でも残念ながら日本の政治家には、そういう胆力が無いですから」

大井「うんうん」

水島「ね。胆力が無いんですよ」

藤「うん。喧嘩の仕方を知らないの、脅し利かず訳にいかないの…」

水島「うん。私は、石破さんと何回か対談をやっていますけど、本当に胆力が無いですよ。気が小さくて、本当に嫌になっちゃう。だから普通の嘩慣れしているトランプとかね」

藤「うん」

水島「ああいう色々強かな各国の首脳が会って話したら、ああ、こいつ、っていうね、直ぐ判っちゃう」

藤「うん、だから面白くないと思って、直ぐ電話、切られちゃったのかもしれませんがね」

水島「そりゃそうでしょうね（笑）、いや、悪口を言いたくないけど、ほんとねえ…」

藤「多分、トランプさんは多分、世界の安全保障なんていうのは、本当に自分達の経済ナショナリズムに関係している時にはやりますけど、多分、アメリカは100年前って未だモンロー主義ですよ。だからアメリカ大陸は守りますと」

水島「そうですね。だから…」

藤「他はやりませんっていう形になったら、多分、そういう日本としては一番…」

水島「モンロー主義、アメリカ・ファーストがね、モンロー主義的なものなのか、ちょっと違う雰囲気を持っているんじゃないかと、私は思っているんだけどね。勿論、そういう元々、アメリカにね、根本的に建国以来、あるじゃないですか」

大井「うん」

水島「二つの路線みたいなのがね、あのう…」

藤「だからトランプさん自体は違うと思うんですけど、もっとバランス感覚があると思うんですけど、MAGAの支持者は本当に信じていますよ」

水島「うん、そうかも分かんないね」

藤「だから顕教と密教じゃないけど、トランプさんはある程度、エリートだから解っているけど、顕教しか信じてない人は本当に暴走するんじゃないかと」

水島「うん。いや、それは、もう第二次世界大戦の時の反戦国世論からね、パッと変わる訳だからね」

藤「はい」

水島「何かやられたらねえ、ということは、だからネタニヤフさんもトランプさんも色んな形で、もっと言えば暗殺とか色んなものが、或いは、9.11みたいなこととか色んなあれが未だ起こる可能性だってあるっていうね」

大井「うん。ある」

藤「だから、やっぱりバイデンさんって小言ばかり言った煩い老人で、全然、恐れられていなかったんですよね。トランプさんって本当の意味での暴走老人だから、みんなが恐れているんですよね」

水島「ああ、そうでしょうね」

藤「そこが多分、これまでと違った形で、既存の戦争を終わらせる可能性が高いと思うんですけど…」

水島「あれねえ、雑談になっちゃうと良くないけど、WWEっていうプロレスの団体があるでしょ」

藤「ああ、プロレスのね、ええ」

水島「あれにトランプとマクマホンという代表とね、リング上で怒鳴り合っている…」

大井「うん」

水島「ああ、こいつは芝居っ気のある奴だなあっていうね」

藤「うん」

水島「そういう奴だから、ああいうのが大好きなんですよ」

藤「ハルクホーガンが応援演説しましたね（笑）」

水島「まるで俺は怖い奴なんだぞって、相手に教えるというか、示すというのは、だから、ディールが大好きなんです」

藤「ええ」

水島「やることがね」

藤「ええ」

山中「だから、相手が何をやるか判らないっていうね、それが一番で、彼は喧嘩のやり方を知っているから、ディールっていうのもそういうことだから…」

水島「そうなんです」

山中「要は、日本はそれと全く反対なお上品な勉強の出来る方々ばかりの世界になっちゃったから、政治家も含めてね。政治家二世が多いけれども、だから、まるで、そういう世界を

知らない訳ですよ。うん」

水島「だから、話し合えば理解できるとかね」

山中「ええ」

水島「腹を割って、何処の腹だって言うんだけどね。腹を割って話せば解かるとかね」

山中「私なんかでも思っていますよ（笑）」

藤「（笑）」

水島「はい。有難うございます。では、福井さん、宜しくお願いします」

福井「これから、どうするか」

水島「はい」

福井「対米関係」

水島「はい」

福井「うん。だからアメリカに無視されたら、まず凄くラッキーですよ」

大井「（笑）」

水島「ああ、やっぱり来たね（笑）」

福井「はい」

水島「ええ（笑）」

福井「いや、もう日本はね、小国でハッピーです」

水島「うん、うん」

福井「ね、僕、ジリ貧は全然、怖くないですが、ドカ貧が怖いです」

藤「え？」

福井「ドカ貧」

藤「ああ、ああ、ドカ貧ね」

福井「ね。だから、日本は、これからジリ貧です。でもね、ジリ貧で滅びた国は無いんですよ。ね。国っていうのはドカ貧で滅びているんです」

水島「ドカ貧だと滅びますかね」

福井「そう、そう」

藤「あのう、七転びってありますからね」

福井「ああ、そう。だから、もうねえ、為すがまが意外にいいかもしれません。麥にね、欲を出すと失敗するだけ。今もおっしゃいましたけど、そんな人材は居ないんだから。だか

ら多少はアメリカに有利なディールであっても、はいはいと言っているのが、結局、勝つんじゃないんですかね。だって次の世紀、22世紀に残る先進国は日本だけだと思っていますよ」

水島「うん、そうですねえ」

藤「さすが福井節。いいですねえ（笑）」

福井「だって他の国は、どんどん移民を入れて、ほら、昔のアメリカと違って全然、統合できていないでしょ、国民として」

水島「いや、あっちは、まあ、これは西尾幹二先生の言い方だけど、世界だったから」

福井「ええ」

水島「アメリカは入れても未だ復元力とかある。だから国民国家で育った…」

藤「そうですね」

水島「ヨーロッパの国は移民を入れたら、もう全部、バラバラになって、どうしようもなくなっていくっていうね」

福井「ええ。でもアメリカも1924年から1965年迄の40年間は殆ど移民を入れていなかったんですよ」

藤「そうですねえ」

福井「殆ど。だからアメリカだって、そういう時代があったんだから」

水島「そうですねえ」

福井「日本も、こう…」

水島「おっしゃる通りです」

福井「ね。入れなかったら。それでね、少子化は絶対、永遠に続かないんです。必ず反転します」

藤「ああ、反転しますね。そりゃ、そうですね」

福井「何故かと言うと、子供が欲しいか欲しくないかは、かなりの程度、遺伝ですね」

水島「うん」

福井「女の人」

水島「そう」

福井「そうすると、あまり子供が欲しくないっていう人が今、淘汰されている過程、プロセスだから、いずれ反転します。だからイスラエルのユダヤ人ですよ。ユダヤ人の特種出生率は今、3です」

石田「うんうん」

藤「ああ、なるほどねえ」

石田「あれはね、世俗的な人は全然、子供、産まないんですけど、宗教的に凄く熱心な人は、5人も6人も産む訳」

藤「ああ～、そうやって…」

水島「そうか、それで増やすようになってくる訳だ」

福井「それでイスラエルはね、どんどん右傾化している訳ですよ」

水島「うん」

福井「ね。世俗的な人の代表だった労働党は、もう見る影もないでしょ」

水島「う～ん」

福井「だからね、人口の問題は、いずれ反転します。まあ、僕が生きている間じゃないかも知れませんが」

大井「(笑)」

藤「まあ、そう、ロング・スパンでね」

福井「ロング・スパンで」

藤「うん」

水島「まあ、それは結構、納得させられる論理だと思うんだけどね（失笑）」

福井「はい」

水島「ただ、これ、本当に真面目にね、自分達の…」

福井「いや、僕、真面目ですよ」

水島「違う、違う（苦笑）」

一同「(笑)」

水島「福井さんが真面目なのは知っていますよ。そうじゃなくてね、やっぱり、今言った様なのを真面目に考えるべきだっていうね」

福井「ええ」

水島「ちょっと突拍子も無いように、一般には聞こえるかも知れないけども」

福井「ええ」

水島「でも非常にリアリティのある話でね、それと将来、我々の国がどういう国になっていくか。さっき言った様に、小さくてもピリリと何とかっていう政党があったじゃないですか。と言うより、我々の日本という国が、どういう形でアジアや世界の中で存在していくかっていうねえ、経済大国とかは、もう遥かな夢ですから。こういう中で、どんな形の世界で一番、幸せな国になれるか、江戸の昔は世界で一番、子供が可愛がられてる国っていうねえ、訪問

してきた外国人がそう言ったっていう…」

福井「今も、ですよ」

水島「うん、まあ、今は何だか子供が不幸じゃないかっていうところもあるけど。ただ今言った様にね…」

福井「日本ほど幸せな国はありませんよ」

藤「両極端になっていますよね」

水島「まあ、だから、そういう意味でのね、我々が、どういう国になっていくかっていうのもね、もう一回、ちゃんと考えなきゃいけないっていうかねえ」

福井「いや、為すがままで」

水島「為すがまま？」

福井「(頷く)」

水島「本当に大丈夫かなあっていうのがねえ…」

藤「いいなあ、無為自然の道、老子の世界ですね」

水島「もう、そこが老子の世界になって来るかも分かんないけどねえ、私は未だ、いい歳こいて、本当に大丈夫かなと思っているところがあるんですけど、はい。石田さん、お願いします」

石田「はい。トランプさんの言葉を一言で纏めると、何か僕らにとって、ポジティブに考えると、自分達の足で立ってっていうことですよ」

水島「うん、そうですね」

石田「インディペンデントをしろと。日本も日本人も独立自尊で自分達の足で立って自分達で生きていきなさいよということなので、そういう方向に向かって行った方がいいと思うんですよ。為すがままだと、日本は、ちょっとヤバいなと僕は思いますね。じゃあ、どういう風に、その独立するか、インディペンデントするか、要は自分の頭で考えて自分で動くっていうことですよ」

水島「うん」

石田「さっき冒頭で話した上から言われるがまま、ドーナッツバッヂを胸につけてマスクをして、ネクタイ締めたサラリーマンが何も言わずにロボットのように入って来るっていう姿は、何も考えていない思考停止に陥っている人達の部類かなと、僕は思うんですね」

藤「うんうん」

石田「そういう人達が少しでも自立して、自分の足で立って自分達で生きていけるようなことを考えて行動できるような状況をつくっていこうというのが、今の日本が目指すべき方向じゃないかなと、僕は思います」

福井「でも、そうしなきゃいけなかったらそうしますよ、人間なんだから」

石田「いや、だから、それはメディアの功罪っていうのも大きいと思うんですよ」

福井「ええ」

石田「我々が真実を知らないまま来ているっていうのが、タッカー・カールソンも言っていますけど…」

福井「はい」

石田「西側諸国の人間は西側諸国の嘘、偽りのメディア報道によって全て包み隠されて来たと。何処で何が起きているのかっていうのが判らないまま、言われるがままに行動するしか無いっていう人達が多かったから、だから行動も出来なかった訳ですよ。そういう風にさせられて来たから。でも、そこは真実を知る一つのチャンスが訪れたと思っていて、トランプさんは大統領になったら、3つのことを明らかにすると言っていますね。一つは9 1 1。もう一つはJ F Kの暗殺事件」

藤「うんうん」

石田「そして、もう一つがエプスタイン島ですよ」

藤「うん」

石田「この3つが明らかになったら、日本人も相当、明らかにされちゃう、あの人やこの人とか居ますから」

水島「それは、だってジャニーズ事務所の問題とかね、宝塚の問題だ、何だらかんだらね」

石田「次から次へと、そう」

水島「日本の中でもバンバン出て来て、ただ、もし、この3つをやれたら本当に殺されるんじゃないかというね」

石田「いや、そう。だからトランプさんの命が、ちゃんとあるのかどうかっていうところも勿論、心配ですけど」

水島「C I Aは、いつでも誰でも世界中の誰でも殺せるっていうね」

石田「そうなんですよ。それはJ F Kの関係はC I Aが絶対、殺しますね」

山中「うん」

水島「でも、そういうことを言っていること自体がね、相当な力、影響力になるよね」

石田「そうですね。そうなんです。そうしたらね、日本も、ひょっとしたら厚労省とかザイム真理教とか、そういうところも何か日本人が知らない情報なんっていうのが次から次へと出てくる可能性っていうのがある訳で、そこで気づいても遅いと思うんですよ。

だから、これから、そこに向けて何か物凄く大きな変革が訪れるのは、皆さん、何となく、解っていると思うんだけど、どんな変革が来るか分かんないけれども、その中で、一人一人が独立して動いて、自分なりのちゃんと情報収集をして、まずマスコミだけを鵜呑みにしないというようなね、そして水島社長も、よくおっしゃってますけど、正しい歴史認識を知らない、多分、日本人は自虐的な思想っていうのが続いて行ってしまうんじゃないかなと」

水島「うん」

石田「だから、この間も青森の三内丸山とか行って来ましたけど」

藤「うん」

石田「日本人のトイレが世界で一番、きれいだとか家族の団欒があるとか、いただきますって、そういう文化は縄文時代につくられたんですね」

水島「全部、あるでしょ」

石田「全部、あるですよ」

水島「そうです」

石田「三内丸山の中に全部、あるですよ。だから、それが日本人だっていう何か、僕らが、だって日本史で教わる縄文時代って、子供の頃、教わった日本史の縄文人って、槍を持って獣を追っかけて野蛮な生活をしていたって教わりませんでしたか」

水島「そう、狩猟採集民（笑）」

石田「いや、違うんだなあ、縄文文化って凄いんだなあっていうことも感じましたし、それが日本人の魂とか原点みたいなものがあるっていうのが解かるだけでも、ああ、日本人って、実は世界で最も優れている民族なんだっていうことが判ると思うんですね。だから、そういうような認識を、やっぱり勉強していかなきゃなんないなあと思うんですね」

水島「だから本当に、今、言った三内遺跡のあれを言うと、大集落ね、みんな、集まって、それで栗林を植えて、それを常食にして…」

藤「縄文時代って1万年ぐらい続きましたからねえ」

水島「だから狩猟採集民の石器時代から発展したようなのじゃないんですよね」

石田「それは、みんなで分け与える文化っていうものが、その時にあったし」

水島「そう、分かち合う文化っていうかね」

石田「そうそう、そう」

水島「だから、こういうようなものがあつたって、それから1万6千年って言われているけど、それだけ争いが無く、その場で、みんなで共同生活が出来たっていうねえ」

石田「うん」

水島「これは八紘一宇とかね、そういうベースの思想に繋がっているっていうかね…」

藤「そうですね」

水島「みんな、人類、皆、一家というかね、悪いことを言ったオジサンが居ましたけどね」

石田「ああ、人類、皆、兄弟」

水島「実際はね、そのような形の、やっぱり、今、おっしゃったように、そのところで思い出すことがベースの中に未だ庶民の中には凄く残っている」

石田「うん」

水島「お馬鹿な政治家や役人さんや色んなメディアは違うけども、庶民の中に残っている。だって本当に浅草の観音様に行って明治神宮に行って、御大師様、行ってね、日の出を拝んでポンポンなんてやっているね、何か、そういう先祖の時間というものを共有できる日本人の良さっていうのは残っているんでねえ、今、言った様に正しい情報のきちっと伝わる事ね。

これは、また来週、多分、出ると思います。今日、林千勝さんとの対談の中で出ていたのはアメリカのCDCの問題で、中心になってやっていた人間が、これ、バンされると困るんだけど、これは危険なもので危ないものだったと認めちゃった」

一同「うんうん」

水島「認めちゃったってことですけど、今、厚労省は全く認めていません」

藤「言わないでしょうね」

水島「はい、言わないです。こういう役人どもが居て、日本人の命に関わる問題。次にまた、今、レプリコン・ワクチンが始まりましたけど、これだって治験がどのくらいあるとかね」

藤「うんうん、うん。はあ～」

水島「実は、来週、我々は明治製菓ファルマに街宣活動、やりますけどね」

藤「ああ、ああ、あ～…」

石田「うん」

水島「原口さんが訴えられるってね」

藤「そうですね。うん」

水島「でも、訴えられないですよ」

藤「ああ、訴えられないんですよ」

水島「いや、今のところ。直ぐ、やればいいじゃない」

藤「ああ、やらないんですか」

水島「いや、今、やるやるって言っているんですよ」

藤「うん、うんうん」

水島「でも、ずう～っと…」

石田「やるやる詐欺で（笑）」

水島「やっちゃったら本当に大騒ぎになるから」

藤「うん、だから…」

水島「やってくれた方がいいと」

藤「なるほどね」

水島「私も一緒に訴えろと思っているんだけどね」

藤「(笑)」

水島「そのぐらい、こういった問題がどんどん、ばれ始めているというね」

石田「うん」

水島「あのトランプ時代の良さっていうのは、今言った三点があきらかになるかどうかは別としてね、と思いますね」

石田「うん」

水島「はい。そういう意味では、最後にエルドリッチさんに日米関係、或いは、これからのことを聞いて、今回の討論を終わりにしたいと思います。エルドリッチさん、お待たせしました」

エルドリッチ「はい。有難うございます。3回目の発言として、トランプ次期政権が日本に齎す影響を、私なりに簡単に纏めると、先程、藤先生だったと思うんですけども、トランプ政権は、100年前のアメリカを目指すと言うか再現するとおっしゃったんですけども、私自身は、どちらかと言えば50年代のアメリカを再現しようとしている。即ちアイゼンハワー政権的な政策になる。減税、小さい政府、そして同盟国が負担する。そして介入主義を控える」

水島「うん」

エルドリッチ「完全にやめる訳では無いんですけども、結構、CIAを使っていたんですけども、とにかく介入主義はしない」

水島「うん」

エルドリッチ「あと、停戦、朝鮮半島もそうだったし、あとベトナムもそうだったんですけども、やはり、そういう時代を目指すんじゃないかなと思う。何が戦前と戦後で違うかと言うと、例えば20年代のアメリカの共和党と50年代のアメリカの共和党、何が違うかと言うと、アメリカも超大国になってしまったので、そういう戦前の時代は、もう戻れない。だから、その超大国になったことを経て、トランプは多分、50年代を意識すると思う」

水島「なるほど」

エルドリッチ「とにかく冒頭で申し上げていたんですけども、革命が起こると思います。行政改革にしても、その癒着の問題を解体する。利害関係を解体する」

水島「うん」

エルドリッチ「だから非常に速いペース、しかも4年ではなく2年でやる。2年後には中間選挙がある。上手くいけば民主党は暫くの間、終わっている。もう誰も信じない。そして、人材が民主党には無い。みんな、年寄りの人達ばかり。まあ、カマラが居るんですけども彼女も終わり。さっき誰かが、彼女はそれなりの仕事、まあ、経験があるけれども、それが全然、違う。もう中身が無い。今回、それが証明された。じゃあ、もし、アメリカが革命を

起こしているんだったら、日本は、どうすべきか、ということですが、私は、同じスピード感、緊張感を日本が持つべきだと思います。

言ってみれば、合わせるべきと思っています。しかし、それは言いなりになりなさい、従いなさいということではなく、激しい変化が始まる時代ですので、今の日本の政治とか永田町は、そういう早い決断をする人達が集まっていないのです」

水島「うん」

エルドリッチ「その意味では、やっぱりアメリカから参考になるものを取り入れる。例えば、組閣する時、もっと民間から採用するとか。あと革命の背景には、既存のメディアの役割が、もう終わっている」

水島「うん」

エルドリッチ「そうになったら早く日本の既存のメディアを潰すか、影響力を縮小して、より内容の濃い、しかも事実に基づいたことを報道する。言論の自由が、しっかり保障される。所謂、ヘイトスピーチとか、そういうものは、そもそも無いので、だから、しっかり国民の権利を守るべき。

あと、アメリカの改革の中で、さっき言いましたけども色んな癒着があるんです。日本で言えば農協の問題とか、或いは、こっちのジャブの問題、ワクチンの問題とか」

水島「はい」

エルドリッチ「これからアメリカで色んな裁判が起きると思う。日本も是非、それを参考にしたいなあという風に思っています。あと、お話があった、石破さんがトランプ次期大統領に会うとかいう話ですけども、私は、あまりお勧めしない」

水島「それは、そうですね（笑）」

エルドリッチ「ですが、やっぱり安倍総理がやったので、それが結果として良かったと思う。しかし石破さんは安倍総理ではないことと…」

水島「そうですね（笑）」

エルドリッチ「安倍総理がやらないといけない事情があった。2016年9月に彼が間違っ
て、国連総会の前後にヒラリー・クリントンに会ってしまった。私は丁度、その日、たまたま官邸に行ったので、これについて物凄く批判した」

水島「うん」

エルドリッチ「これがアメリカ人からすると、内政干渉と感じる」

水島「ああ、なるほどね」

エルドリッチ「何故ならヒラリーは、そのあとの演説で、それを言及していた。つまり自分が世界のリーダーに信頼されているとか、そういうような話をしていた。当時、安倍総理が会うんだったら、彼女だけではなくトランプと、それ以外の二つの政党の党首、候補とも公平に会うべきだと」

水島「そうですね」。

エルドリッチ「うん。だから、今回、もし石破さんが行くんだったら、正直なところ非常に心配しているけれども、トランプは、きっと無礼のことはしないと思います。実は、月曜日に石破さんからお電話を戴きました」

水島「はい」

エルドリッチ「色々助言をしているんですけれども、ずうっと前から付き合いがあったんですが、私にとって望んでいる、まあ、日本にとって望んでいる総理大臣ではない。だけれども首相である限り、まあ、可能な限り、皆さんが応援すべきだと思っています。

最後ですけれども、ユダヤ人の出生率、出産率の話ですけれども、私のラビー、ラバイの友達が居るんですけれども、彼には10人の子供達が居る。これは、どうやって、やっているのか、さっぱり分からないですけれども、何か収入がある訳ではないし、どうやって生活しているのか不思議ですけれども、でも、よく考えたら、彼はラビーですので、物凄く信仰心が強い」

水島「ああ〜」

エルドリッチ「だから信仰心が強い、宗教心の強い人達、ただ、私はカトリック派。あと、モルモン教も、結構、子供を産む側です」

水島「モルモン教もそうですよね。昔、一夫多妻制だったから」

エルドリッチ「これから日本の少子化問題で、恐らく信仰心が強ければ、或いは、深ければ、そして愛国心があればある程、少子化を逆転できると思うんですけれども、それが出来なければ非常に大変な長期戦というか、大変な問題だという風に思っています。以上です」

水島「有難うございます。エルドリッチさんね、今、石破さんの話が出ましたけども、基本的に将来の日米関係ですね、これからは、もう今迄通りとはいかないような気がしますけども、日米関係をどういう感じでイメージしますか」

エルドリッチ「まあ、ハッキリした答は出来ませんけれども、何故なら色々変化するものがあるんですけれども、一つ申し上げると、いつもの番組で申し上げているのが、日米関係は日本次第です。だから日本が描きたい日米関係があれば、それを、どんどん、やりなさい。二つ目の発言というか、それに関係するんですけど、以前に番組で紹介したんですけれども、これが中国に対抗する仕事ですけども、基本的に日米同盟を、どうやって発展すべきなのか。

ここに色々な政策提言があるんですけれども、これは2021年に出しました本で、何故、出したかと言うと、この5人の内、何名かがトランプ政権に入りますので、これは、日本語しかない本です。英語で書いていない。だから、日本人に向けて、3年後のトランプ政権に入る人達は、どのような考え方があるのかを示す為のものだった。そこまでトランプが再選することには自信があった。だから、是非、読んで戴ければ幸いです」

水島「はい。ということで、皆さん、お話を聞いて、これからのことを色々とお考えになったと思います。これは北海道の方で、チャンネル桜北海道がエルドリッチさんの『日米関係への示唆』という講演を11月22日に札幌で開催します。是非、北海道の方は聞いて、オンラインもやるのかなあ。是非、エルドリッチさんのお話を聞いてみて下さい」

エルドリッチ「有難うございます。オンラインでもされる予定です」

水島「はい。宜しくお願いします。今日は、皆さん、どう思われましたでしょうかね。何か我々の国がポカンと空中に浮いているみたいな印象を受けましたけども、いつも福井さんのお話は、何か、あのう…」

福井「(笑)」

水島「大丈夫かなあって思う様なこともありますけど、ただ大事なものは、福井さん、移民は本当に駄目ですね」

福井「それだけ」

水島「ね」

福井「それ以外、もう政策は不要」

水島「ここまで期待しない人は珍しいっていうね」

福井「あとは為すがまま」

水島「そうですねえ」

藤「いや、聞きながら自信が持てます」

水島「ね。ただ本当に移民の問題は、もう世界的にアメリカでも何処でも問題になって、やはり、みんなが不幸になるっていうね。来る人も迎える人も不幸になっている。川口の問題だけじゃない。もうスウェーデンやフィンランドやデンマークでは、完全にシャットアウトどころじゃなくて、スウェーデンは500万円を払っても出て行ってくれって」

藤「帰ってくれって話ですよ」

水島「金を払ってまでっていうね」

藤「そうそう (笑)」

水島「それも50万じゃなくて500万ですからね。うん、みんな、一回、スウェーデンに入りたいていうね (笑)」

一同「(笑)」

水島「そういうこともあるぐらいだと思いますけれど、そういう問題でございました。この問題は、また1月就任までに色んな事も起こると思いますけれども、我々の国の問題も自分のこととしても色々考えてみたら、どうでしょうか。今日は、皆さん、有難うございました。以上で終わります」

一同「有難うございます」

***** お わ り *****